恋愛小噺

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛小噺

【Ｎコード】
Ｎ７８５０Ｔ

【作者名】
桜

【あらすじ】
恋愛小噺。
切り取った恋愛の断片。
全ての小説に繋がりはありません。
起承転結もありません。部分、部分が読みたい方へ。

たまに気分で繋がります。
連番ものは繋がっています。
ですが、多分急に途切れます。

ブラッディ・メアリ

「歳下ってどう思う？」
「別に、どうでもいいんじゃない？」

カウンターの上に置かれたカクテル、グラスの細い首を辿って飲み損ねた水滴がコースターに染み込んで行った。ノーブルな色合いのマニキュアを塗った人差し指でそれを拭って、親指に擦り付ける。

暇潰し、と久し振りに入った懐かしいカウンターバーに昔馴染みは誰もいなくて――当たり前だ、ここに通いつめたのは三年も前のことだった、無言で席に着くとマスター特製のちょっとした前菜が出てくる。

美味しそうな子羊が入ったから、と前置きして出された料理は何年経ってもやっぱり私の口には合って、思わずナイフを置くとフォークだけで食べてしまう。唇にソースがついても、気にしない。親指で拭えばいい、それがこの店にはお似合いだ。

何人か前の彼氏に教えて貰ったこの店は、いつ来ても閑古鳥が鳴いていて本当にいつ来てもまだ店が開いているのか不安になる。

濃いブラウンの看板、聞こえるか聞こえないか分からない程の小さなミュージック。ジャズとかボサノヴァとか明確な曲は似合わず、これだけ小さな音ならばむしろ演歌でもいいような気もした。

耳に垂れるチェーンのイヤリング、捻子を締め過ぎたのか少し耳朶が痛かった。首を小さく傾げて外したイヤリングを二つ、カウンターに置く。間接照明はカウンターの上に三つ、絞り込んだ光を反射して磨いてきたイヤリングが光っている。

「じゃ、ありってことなんだ？」
「さぁ？　どうかしらね」

私の歳には酷く不釣り合いな若い男が横に座っている。まるで知り合いの様に話しかけてくる男は、首を傾げてグラスを持った私の姿を熱っぽく見詰めているようなそんな勘違いを私にさせてしまう。男が人差し指で遊ぶ私のイヤリング、暗い間接照明ではチープには見えないけれど日に当たると途端に安っぽく見えてしまうメッキだ。

男にしては少し伸ばし過ぎの爪を私は気分悪くしながら視線を流し見遣ると、グラスを唇に当てる。グラスに付いたルージュを親指で拭う、と教えてくれたのは誰だっただろうか？　滑って付いた唇の痕をわざと拭いもせずに舌で舐めた。

止まってしまう会話に焦れて、男が口を開く。

懐かしい思い出に浸っているんだから少し黙っててて、そう思っていても口には出さない。呆れた視線だけで気付くだろうか。

「いつもここに来てるの？」

「気分が向いた時だけ」

「じゃ、今日はそんな気分だったんだ」

そんな気分って、どんな深読みをしているのか。考えるのも馬鹿らしいほどの台詞に、つい口端を上げてしまう。

グラスに残る甘い飲み物はもう底が見えている。今日は一杯だけと決めてここに来た筈なのに、この馬鹿らしい駆け引きを楽しんでいる自分。

落せるって思ってる？　そんな簡単に見える？

何も言わないでいてもいつも通りのカクテルが出てくると、昔馴染みのオーダーを覚えてくれていたマスターが愛おしくなる。

初めてここに連れて来られた時は私もまだ可愛らしくて、借りてきた猫みたいだった。慣れないカウンターで膝を擦り合わせて、聞かれた事にただ頷くだけだったのに。

「ね、何歳？　何処に住んでるの？」

「教える様な関係になる気ないの、そっちから教えてよ」
「じゃあ、教えたら教えてくれる？」

シルクジャージのワンピース、胸の隙間から立ち上るのは夜の街にお似合いな官能的な匂い。誰を持ち返る訳じゃないけれど、網を張っているのは勝手でしょ？

ワンピースの裾に隠れているのは太腿真ん中までのストッキング、その上はベルトで止められている。見えない所なのにそれだけで仕草が色っぽくなってしまうのは、剥き出しの太腿が恥ずかしいからだろうか。手首を立てたら流れていく繊細なチェーンのブレスレット。

「どうして知りたいの？」
「え、聞いちゃ駄目？」

聞いた私の声に悪戯心が混ざり合う。しどろもどろになって行く男の声に、思わず咽喉が渇いて新しいグラスにまた唇を付けた。

いつも思うけれど、やっぱりこのカクテルは私の舌には甘過ぎる。可愛らしいピンク色のカクテル。その時は無邪気に唇を付けて、一歩大人に近付いた気分になっていた筈なのに。

そうだ。トマトジュースが苦手だと言った私に勧められたブラッディメアリ、何と混ぜてもやっぱりトマトジュースは苦手だったけれど頼んでみようか。

たまには浮気心や冒険心もいいかもしれない。真面目一辺倒だった枷を外すいいチャンスかもしれない。

「いいよ、駄目なんて言ってない」

教えてよ、知りたいの。そんな事を言いながら、視線を合わせて唇だけ笑って見せる。

「犬、飼ってるんだ」
「犬、好きよ」
「見に来る？　可愛いんだ」

名前、年齢、乗っている車、好きな色。必要最小限、それでも可能な限り教えてくれる無邪気な声に相槌を打った。
垂れてくる水滴を拭うと、親指にルージュの赤が付いた。グロスも塗らずにそのままベタ塗りしたパールの混じらない深紅の口紅、きっと色は薄れてまだらになっているに違いない。

「ね」
「何？」
「口紅、取れてる？」

首を傾げると肩に横髪が滑り落ちる。僅かに開いた唇を凝視する男の視線に「どう？」なんて、小さい声で囁けば眉が少し寄って行くのが見える。
行こうか、戻るか。攻めるか、逃げるか。見え隠れする葛藤に内心冷や冷やしながら、グラスの中身を飲み干した。咽喉に焼き付く苦味と酸味、可愛らしい見かけの割に随分とえげつない度数なのだとマスターが笑った事を思い出した。
久し振りに来ると、これだから駄目だ。高揚した気分のまま、らしくない事までしてしまう。
チェーンバッグの持ち手を掴めば、慌てて体を起こされる。伸ばしてくる手がチェーンを掴む前に「おやすみなさい」と笑った。

「また、会えない？」

縋り付く声を振り払って背を向けるのは、そろそろ潮時と感じた

から。

「会えるといいわね」

社交辞令は大人の武器だ。イエスもノーも曖昧な返答にも似た自分の感情が疎ましい。

「明日は？」

明日は、二年越しの彼と結婚式場の打ち合わせに行かなくてはいけない。

着ていくのは薄いブルーのニットと、ベージュのフレアスカート。ブーケの花のメインはガーベラ、リボンはピンクにしてドレスはまだ決まっていない。

「駄目」

一時の感情に支配されるよりも積み重ねてきた安定した日々を選ぶべきだと訴える自分と、過ぎ去った激情の日々に懐古の情を残す自分が鬩ぎ合う。求めて、追ってくる感情をいつから浴びていないのか。思い出せない程なのが、私の足を止めてしまう。

もっと引きとめて、振り払って気持ちだけ満足したい。

「明後日は？　近くまで行くよ」

明後日は向こうの両親と会食よ。結納の日付まで時間が無いから、最終打ち合わせをしなくてはいけないの。

縋り付く声に噴き出しそうになる。こんな私に、どんな運命を感じたの？

我関せずと言った風のマスターに数枚の札を出して「飼い犬に宜

しくね」と微笑んだ。
看板の打ち込まれた重い扉を閉める寸前の男の顔、見捨てられた小犬の様だ。閉める間際まで視線を合わせたまま、完全に扉が閉じたのを確認して背を向けた。
夜風が開いた胸に苦しい。

一夜の恋なんて、そんな難しい事。出来ないわ。

不機嫌金魚

いくら夏だって言っても、海辺の夜風はやっぱり寒いものだ。
薄着でこんな所に立っている自分を少し責めながら、サマーニットのロングカーディガンに包まれた腕を両手の平で強く胸に引き寄せる。
薄暗闇の夜空にはまだ打ち上げ花火の残像は見えない。僅かに震える手首を出して時計を見たら、もう少し時間には早いらしい。
こんな時に限って、スカートは風に靡くシフォン素材で。こんな時に限って、腰まである長い髪は高く結い上げてある。耳に長く垂れて風に揺れるラインストーンのピアスが恨めしい。ここがせめて隠れてさえいれば、きっと少しは温かいのに。
横に立つのは、スーツ姿の男。鈍感なのか敏感なのか、全く読めない男。
仕事姿は知っているけれど、私服姿は知らない。それくらいの仲で。それでいて、仕事中は結構話もするけれど携帯電話の番号は知らない。それでしかない仲。
短い前髪を軽く上げて、しっかりとした上半身を背広で隠している。
正直、気が利く男ならその温かそうな背広、横で震えている女の子に貸してくれるなんて素敵なこと考えるだろうけれど。お生憎様、そんな気の利く男である筈はない。
だってこんなに前面に出している好意に全く気付かないのだ。彼はどう考えてもおかしいと思う。

「……寒いね」
震え声の私。
「……本当だね」

震え声のあなた。

正直「それだけ着ていれば、十分温かいだろ！」だなんて、いつもの私なら怒鳴っているに違いない。背広が駄目なら、中に着ているワイシャツでいいから貸してくれないかしら？　ああ、もうせめてネクタイでもいいのに。

白いクロコ型押しの腕時計。指し示す時間は打ち上げ花火の予定時刻まであと十五分。

これほど開始時刻を守る日本の慣習を憎んだ事は無い。海外に行って時刻通りに来ない電車にも、タクシーにも暴言を吐いたあの時の自分が心狭く見えてくる程よ。

十五分位いいじゃない、そろそろ打ち上げ始めて欲しい。だって、もうそろそろ心折れてしまいそう。

海面を辿って、吹き付けてくる少し湿った夜風。流されるシフォンのスカートに色気も何も感じることなんて出来る筈もない。

らしくない勇気振り絞って「腕、組んだら温かいかも」なんて、言ってみたのに。

「そっか、そうだよね」

動く彼の腕に期待の膨らんだ私の落ち込みようと言ったらない。

ああ、自分の腕を組めって言ってる訳じゃないんだってば。

偉そうに、腕を胸の前で組んだ男女が二人。最高に雰囲気ある筈の打ち上げ花火を待って海辺で待ってる。

本当は入っちゃ駄目な仕事関係で使う作業場の扉。無理言って開けて貰ったお陰で見える人影は全く無くて、気付くと空に瞬いている星空を重役みたいに踏ん反り返って見るしかない。

擦り合わせた膝が細かく揺れて、奥歯が寒さで噛み合わない。不貞腐れた顔で横を見たら、暗闇の夜空を見上げる嬉しそうな彼の顔。

ああ、腹が立ってきた。

「そろそろかな」

声の主は、横で震えながら不機嫌になっている私に気付いてさえもいない。

やっぱり無理なのかな、同僚以外には昇進不可能かな。そう思ってしまうと、急に小心者の私は楽しみにしていた筈の花火から途端に興味を無くしてしまう。

勝ち目が無い恋愛なんて、時間の無駄でしょう？　少しでも勝機があれば攻めようって気になるけれど、無駄な駆け引きなんて意味が無いもの。

横で楽しそうにしている彼の良く磨かれた革靴の上にパンプスのヒールを叩き込みたい気分になりながら、カーディガンに包まれた腕を小さく溜息つきながら擦って見せた。

大きく嘶くのは、夜空に咲く大輪の花。こんな泣きだしそうな気持ちで見るなんて、思ってもみなかった。

二人で「綺麗だね」って楽しみたかったのに、ずっとそれだけを楽しみに今週は仕事をしていたのに。

そんな私を振り返った彼は小さく「寒くない？」って、今更私の耳に囁いてくる。

私の耳に唇を寄せたのは、何も下心があった訳じゃないんでしょう？　ただ体に響いてくる大きな打ち上げ音が声の邪魔をして、聞こえないかもしれないって思っただけだから邪推するのは無しにした。

だってもう期待するのは疲れてしまった。

花火が終わったら、もう彼なんて諦めてしまおう。良かった、まだ本当に本気にまでなっていなかったから間に合うもの。携帯電話だって聞いてないし、告白だってまだしてないもの。

良かった、良かった。うん、本当に良かった。

こんな気の利かない男なんて、こちらの方からお断りだわ。きっ

と苦労するにきまってる。
言い聞かせた言葉は私の脳裏に反響する。何度も言い聞かせてしまえば、大丈夫。

「ほら、見て。凄く綺麗だよ」

笑いながら空を指差す彼の声に返事もせず、下唇を噛む。いい大人の癖にこんなことではしゃぐなんて子供っぽいと思う。
空には降りしきる星の波。打ち寄せて、漣を立てて影もなく引いて行く。咲くのは、真っ赤な大輪の彼岸花。
白、赤、緑、青、小さく大きく、流れるように、押し寄せるように。
肩に手を置かないで欲しい。あまり近くに寄らないで。
嬉しそうな顔をしているのは私が理解不能な男、真意も行動も読めないのが口惜しい。

「凄く楽しみにしてたんだ。仕事、かなり急いで終わらせた」

一人温かい恰好して腕なんか組んでる癖に、そんな優しい事言わないで。
不貞腐れたままでもう花火なんて見ずに、足元の小石をつま先で蹴った。そんな私の顔を覗き込んでくる不安げな彼の顔。

「何か、怒ってる？　腹減った？」
「……空いてない」

可愛くない事を言っているって分かっている。あんなに尻尾を振っておいて、いざ面白く無くなると不貞腐れるんだと、自分でもよく分かっていた。
大きな手の平で私の髪の毛をぐしゃりと撫でて「飯、食いに行こ

うか」なんて、分かった様な振りをするあなたが嫌いよ。

「だから、空いて無いって」

「あー……、はいはい。恥ずかしいよね、腹鳴ると」

「だから、違うんだってば！」

そろそろ勘違いもいい加減にして欲しい。妙な勘ぐりだけは一流なんだから。

まだいくつも鳴り響いている花火に即背中を向けて行く彼の背中を、綺麗な花火に後ろ髪引かれながら私は小走りで追いかける。

暗闇に去って行く背広姿の背中は悔しいけれどやっぱり気になって、はいさようならって出来ないのがまた腹が立つんだわ。

「花火はまた、次にしようよ」

面白くなさそうに唇を尖がらせて彼の指を後ろから掴んだ。背広の脇で温められた指は、私の夜風に冷えた指を無意識に包み込む。

「……冷たっ！　もしかして、かなり寒かったんじゃないの？」

返事もしないでそのまま彼の横を通り過ぎた。

名誉挽回の機会、あと一度だけあげるよ。こんな鈍感な男、私位気の利く女じゃなきゃ誰も構ってなんかくれないよ。

だから、もう私でいいでしょ？

上下関係

１－ＷＥＥＫ　ＳＣＨＥＤＵＬＥ

Ｍｏｎ　以下、仕事以外予定なし
Ｔｕｅ　同上
Ｗｅｄ　同上
Ｔｈｕ　同上
Ｆｒｉ　同上
Ｓａｔ　仕事休み
Ｓｕｎ　仕事休み　トイレットペーパーを買う（シャンプーの買い置き？）

手首の上、重ねたパイプ椅子がガチャガチャと鳴った。
薄いブラウスの上からも分かる腕の灼熱感、重さで腕は悲鳴を上げている。それでも意に介せず、足を進めた。勿論、数歩ずつ重過ぎる腕の飾りを床に下ろして休みながらだけれど。

持てるよね？　と、直属の上司である女が言った。持てません、とは言えずに、勿論持てます、と答えた。
持ち上げる事だけは容易いけれど、それを持って歩くなんて以ての外だ。頼むわね、と背中を向ける薄い背中にこのパイプ椅子を投げ付けてやろうか？　出来はしないけれど、思わず考える。
薄暗い物品室、壁に備え付けてあるスチール製の棚には所狭しと段ボール箱が置かれ、コンクリート剥き出しの壁は見ているだけで薄ら寒い。
狭い物品室を辛うじて照らす蛍光灯はチカチカと点滅を繰り返す。そろそろ蛍光灯の交換時期だ、このまま暗闇に籠っていても埒が明かないだろう。

曇りガラスのドアの古めかしいノブを痛む手首を回しながら開けたのはつい数分前の事、それからまだ数メートルしか歩いていないのに、見かけよりもか弱い自分の腕はギブアップを訴えてくる。

ちょっと待て、だってまだちょっとしか歩いて無いじゃん。

引き摺って持って行っちゃ駄目かな。いや無理か、廊下に傷がついちゃうし。

この際だから、八脚全部横抱きってのはどうかな？　無理無理、自分の底力過信し過ぎだ。

やっぱ無理でしたって、半分物品室に戻して来ようかな。でも、その場合やっぱりこれ持って今来た所戻らなきゃいけないんだよね。

「うわ、壁にぶつかった」

「お前の目の前の何処に壁があるんだ？」

独り言ちた私の耳に呆れ声。

その声は冷ややかな声の後「お前にしか見えない壁か」と繋いでくる。

振り返った私の目の前にはアクアノートを振り撒く香水の匂いと、濃いグレーのスーツ姿。出先から戻ったのか。ビジネスバッグを片手に、広くは無い廊下をふさぐ私の背中側に立っている。

渋い顔、呆れ顔、怒った顔。

見かける彼はいつもそんな顔だ。

今日は薄いピンクのワイシャツに控えめな配色が落ち着いて見えるストライプのネクタイ、短い髪を手櫛でかき上げた無造作ヘアー。んと、今日は強風に煽られたままかもしれないけれど。

「あ、先輩！　お疲れ様です！」

私の言葉に、彼はまた渋い顔。決まっていつもそうだから私は全く気にしない。

「だから、俺はお前の先輩になった覚えはない」

戻って来る台詞もいつも一緒だ。だから、分かっていながら私はついふざけた返答を探す。

「今日もいつもと同じ、車の芳香剤の匂いですね」

速攻で戻って来る呆れ顔と沈黙に満足する。

ああ、先輩。今日もその呆れ顔が眩しいです。

彼は一度私の顔を見て、手首に掛かった八脚のパイプ椅子に視線を流した。

呆れ顔の後、渋い顔。いつも通りに、三種類の表情を巡って目まぐるしく彼の表情は変化する。

「で、そのゴツいプレスリーをお前は何処に運ぶつもりなんだ」

「下の階ですよ、なんか会議に使うそうなんで」

「へぇ」

彼が眉を上げるのには、一体何の意味を持つのだろう。

彼は「お疲れさん」と呟いて私の頭上に手の平を置くと、そのまま擦れ違って行く。それを気にもせず「はい、頑張りまっす！」と私は大きく頭を下げた。

下げた頭に引き摺られて、ガチャガチャと忙しない音を掻き鳴らすゴツイプレスリー。

しかしその例えは少しオヤジ臭いと思うんですが、先輩。
離れていく肩幅の広い背広姿を、含み笑いをしながら見送った。

私は、高校から短大を経て今の会社に就職。
高校三年間はずっとバスケ部で、筋肉と協調性を鍛えた。色気話は全く無し、いわゆるスポーツ馬鹿だ。
バスケ部は結構な強豪校で、練習はかなり厳しくて上下関係ももちろん厳しかった。先輩に廊下で擦れ違うときは先輩が背中を向けていても、頭を下げて大きな挨拶。先輩には、絶対服従。練習後、話を聞く時は直立不動。
勿論その掟は女子バスケットボール部のＯＧに限らず、男子バスケットボール部のＯＢにも幅広く適用していて、この会社に就職した私が先輩に会ったのは新人挨拶の時だった。
地元から出て来て、一人暮らし。短大の友達も高校の友達も近くにいない私は、慣れない雑踏の中一人ぼっち。
慌ただしい毎日の勤務、家事に正直一杯一杯だったんだ。
同じ高校の卒業生と聞いて、つい慣れ慣れしく話しかけた私の前で、彼は「高校時代は男バスだった」とあの少し不機嫌そうな顔で言いのけた。
私よりもずっと歳上の彼とは一緒にバスケをした覚えは無いけれど、私にとって彼は「先輩」
どんなに歳をとろうとも、高校卒業してから結構経っていても、私にとって彼は「先輩」なのだ。
それ以上でも、それ以下でもない。それはずっと変わらない。絶対に。

「おい」

長過ぎる休憩を終えて下の階までの長い道のりを歩き始めた私の前で、自分の部署のドアから片手を出したままで彼が声を掛けてき

た。
声を掛けられたら一度立ち止まって、顔を上げて返事。それは高校卒業しても変わらない身に染み付いたバスケ部の決まり事だ。
「はい、何ですか。先輩」
黙りこくるドア向こうの影。立ち止った私の横を擦れ違う彼と同じ部署の社員に「お疲れ様でっす！」と頭を下げると、また大きな金属音が鳴った。
そんな私の姿を見て微笑みながら「そっちこそ」と返してきた社員が去った空間には、甘い香水の残り香。
開いたままのドア、曇りガラスを通して彼らの声が聞こえてくる。
「おう、お疲れ」「あの件、ちょっと無理そうだね」「らしいな」
「もう少し練ってみるよ」なんて内容、私にはさっぱり分からない。
まずはパイプ椅子だ。この、先輩曰くプレスリーが当面の仕事だ。
未だ話し中のドアを見上げれば、嫌でも視界に入る突き当りの休憩室は今日も日差しが照って暑そうだ。まぁ、休憩室と言うのは名前だけで、今の時間は誰もそこに近寄ろうとはしないけれど。
紙コップの氷は驚くほど早く溶けるし、天井ギリギリまで高く設置してある廊下との仕切りが窓からの日光を照り返すから日焼けでもしそうな程の眩しさだからだ。
何も苦行の為に休憩室には行こうとは思わないだろう、勿論私もそう思う。
「おい」
また聞こえてくる彼の声に「はい、何ですかね」と答える。
パイプ椅子の背もたれが私の腕の有り余った肉を挟んで痛みが走ると、思わず眉を寄せて「痛」と呟いてしまった。無機質なパイプ

を睨みつけて、ブラウスに隠れた腕に思いを馳せる。きっと内出血しているに違いない。
聞こえてくるのは渋い声、渋いのは顔じゃなくて声。
「……壁に立て掛けとけ、後で運んどく」
「いやいやいや、先輩にさせる訳にはいかないです」
「いい。どうせ、あそこに段ボールを取りに行けって今頼まれたからな」
「おおう、なんてナイスタイミング！」
私の返答に、彼はまた黙りこくる。
「あの資料でいいんだな」「ああ、今取りに行くんだ？」なんて会話がまた聞こえて、背広を脱いだ彼がのそりとドア向こうから出てきた。
ワイシャツを肘の直ぐ下まで捲り上げて、手首の腕時計を外してきたらしい。筋肉質な腕が無造作に捲り上げた袖から剥き出しになっている。
パイプ椅子の重さで皺くちゃになった私のブラウスを滑る様に、八脚の椅子は彼の腕に収まった。まるで重さを感じさせない体格の違いに、私はつい微笑んでしまう。
「いや、先輩なら今でもスリーポイント行けそうですね」
「無理だろ、フリースローでも自信ない」
「まぁ、私はこの間ランニングシュートで無様にコケましたけどね」
「威張る事か、それは」
彼はそう、次は声では無く渋い顔で答えると「仕事、戻れ」と言い残して私に背を向けた。
勿論、腕のパイプ椅子は引き摺る事もせずに、彼は軽い足取りで

階段に向かっていく。

「助かります！　お願いします！」

大きな声で彼の背中に声を掛けた私に、彼は一言「うるせぇ」と背中越しに答えた。

まぁ、それもいつもの事だ。私は彼を見送る事はせずに、命令通り仕事に戻る為、自分の部署へと足を返すのだ。

ニンジンの間引き

「好きなんですよ、実は」
そう言うと、当たり前の様に返事が来た。
「知ってますよ、昔から」
宥める様に頭を撫でてくれる。違うんだけどなぁ、それとは全く。
私はいつも黒い麦わら帽子を深めに被って、涙を堪えるのだ。

ニンジンの種を撒く時は浅めに溝を作ってその中に種を落として行くのだと、目の前で長靴が笑う。伸びる軍手は指先までずっと泥塗れだ。
一体何年、同じ軍手を使っているんですか。いい加減指先が破れてしまいますよ、もう。
「あ、軍手が破れていたのかなぁ？　泥塗れになっちゃいました」
ほらやっぱり。長靴が向こうに離れて行った。
畝の中に真っすぐと伸びる浅い溝、私の手の中にはニンジンの種。沢山、食べたくて今回の用意した種は二袋。
きっと新鮮なニンジンは生で食べても凄く美味しいですよ。私は筑前煮入ったニンジンが一番好きですけれどね。
「僕は、きんぴらごぼうに入ったニンジンが一番好きです」
そっか、覚えておこう。次に来る時にはお弁当に入れておきます。春巻きの皮に包んだきんぴらならお弁当に入れてもきっと食べ易いでしょ。冷えても美味しいように味は濃い目にしときます。
お料理は結構自信があるんです。勉強したんですよ。
「わぁ、きっといいお嫁さんになれますね」
そうですよね、だからいつでもいいんですよ。

私は長靴の先を見詰めながら、溝にニンジンの種を落として行く。一つ一つ小さなニンジンの種は出来るだけ間を開けて入れて行くん

でしょ？
去年は考えずに、種を撒いたから部分的にジャングルになったニンジンが悲しかった。
折角ここまで大きくなったのに、抜いてしまうなんて忍びないじゃないですか。もう、本当に寂しかったんです。
「だから、言ったじゃないですか。君は昔から何事も大雑把過ぎるんです」
だから、それはずっと昔の事だって言ったじゃないですか。
もう小さな頃の私じゃないんですよ？　こんなに大きくなったんです。手だってほらこんなに大きくて、傍でしゃがんでももうミミズを探したりはしないんですよ。
ミミズを見つけたからって、シャベルで半分に切ったりもしないんですよ。
「そう言えば、そんな事をしていましたね。いや、子供は残酷だ」
その言葉は、そのままお返しします。
トンボの内部構造を教えてあげると、子供だった私の前で両羽を持って縦割りして見せた人は誰ですか？　大人だってそんなものです。あれは私のトラウマなんですよ。
「あ、あはは。すいません」
あ、そのサツマイモはもう少し離して植えて下さいね。秋には天ぷらを食べたいから、沢山芋が出来て欲しいんです。

長靴が剣先スコップの上に乗って、大きな穴を二つ掘った。小さな畑に用意したサツマイモの苗は全部で二株。
甘く美味しいっていう宣伝文句に負けて買ってきました、私が。
「だから、お金は後であげますって」
いらないですよ。だから、芋の収穫祭は絶対に呼んで下さいね。この芋のお料理権は私の物だから、誰にも触らせないで下さいね。
長靴は、開いた二つの穴を跨いでサツマイモの苗を入れて行く。ちょっと深く掘り過ぎじゃないですか？　まだ苗は小さいのに。大

は小を兼ねるって時と場合に寄るんですよ、分かってます？

言いたい事は沢山あったけれど、私は並んだニンジンの種の上に土を被せる事に集中することにした。長く伸びるニンジンの渓谷。

優しく、ほんの少しだけ土を掛けるんでしたよね。確か大きくなぁれ、大きくなぁれ、って言うんですよね。

「おや、僕が言った事を覚えていましたか」

覚えてますよ、全部。何もかも忘れずに全て覚えているんです。忘れようとしても忘れる事なんて出来ないんですよ。私の記憶力を甘く見ないで下さいね。

「勉強には、発揮できないのになぁ」

その件に関しては完全黙秘権を貫きます。いいですか、聞いても今回のレポートの内容は話しませんからね。どうせ、駄目出しをする気なんでしょう？　分かっています。

大きくなぁれ、大きくなぁれ。土のお布団を被って、元気に沢山芽が出ておいで。

手首がピンクの私の軍手は、もう泥塗れだ。

「ナスは好きですか？　僕は好きなんですけど」

好きですよ、ずっと昔から。もういつから好きだったのか、覚えてない位です。

大きくなぁれ、大きくなぁれ。渓谷に土の雨が降りますよ。

「そうですか、来年からナスも作りますか？　焼きナスも好きだし、田楽も好きです」

私も好きですよ、もうなんだっていいくらい好きです。好きな所を上げると切りがない位です。

大きくなぁれ、大きくなぁれ。土の雨で渓谷が埋まっていきますよ。

「本当に、君は昔から食いしん坊さんですよね」

もういい加減子供扱いは止めて、頭を撫でないで下さい。

つばの大きな麦わら帽子を被って来て良かったですよ、今日は本当に日差しが強くて嫌になっちゃう。少し顔を隠しておこうかな、日焼けしちゃ困るので。こう見えても顔には気を使っているんです。
ニンジンの渓谷が埋まって、立派なニンジン畑が出来上がった。満足して頷いた私の前でサツマイモが少し斜めになって鎮座している。
ほら、やっぱり深く掘り過ぎたんですよ。言う事聞かないから、全くもう。

カタツムリが出たら、薬を撒かないと駄目ですね。木酢がいいって聞きましたけど、どうなんですかね。ジョウロに水を入れて来ましょうか。それともホースで一気に霧みたく水を撒いちゃいましょうか。
ちょっと向こうに行ってきますね、私。
「ホースなら、僕が持ってきますよ」
いえいえ、お気になさらず。本当に大したことはないんです。向こうに行くついでにちょっと所用を終わらせてくるだけなんです。ちょっと行ってきますね。
「ああ、トイレですか」
ちょっと、そこは余り突っ込むの禁止じゃないですか？　いくら昔から私の事を知ってるとは言え、もう妙齢の女性ですよ。いい加減わきまえるべきだと思います。
剣先スコップを持って笑いながら、白いタオルで顔を拭ってる。そんな爽やかな顔をしても無駄ですよ。私は軍手を脱いで、小さなスコップの上に掛けると麦わら帽子をかぶり直す。
「帽子は脱いで行った方がいいですよ、トイレなら邪魔だから」
色々問題があって、今私の頭から麦わら帽子は脱着不可能なんです。いいですから、私のトイレと麦わら帽子は放っておいて下さい。
ちょっと行ってきます。
「はい。手は洗ってくるんですよ」

軍手、投げてもいいですか？　白いタオルの向こうで笑い顔。

君のオムツは僕が替えたんだよ。

初めてハイハイを見たのは四カ月だよ、本当に早かったから絶対に体操選手になると思ったんだ。

掴まり立ちは七か月。母親が離れるといつもベビーベッドの柵を噛んでたよ。

初めて僕と外出したのは、確か動物園。

初めて買った玩具は、確か合体物の巨大ロボ。

小さな頃に好きだったのは、リンゴとバナナ。逆に嫌いだったのはカボチャ。離乳食を何度踵落としされて、子供食器を割られたか。

三歳までオムツが取れなくて、一時間ごとに脇を抱えてトイレに走ったよ。

五歳の初めての運動会、全然関係ない所で転んで笑ったなぁ。

七歳に突然、一緒に寝たくないって言われてショックだったんだ。

麦わら帽子の中で鼻をかんで、目元を拭いた。脱着不可能な麦わら帽子は勿論そのままで、少し深めに被って目元を隠す。

ニンジンは植えたから、次は水やりかな。

ホースのカタツムリを両手で持って、引き摺って歩くと後ろにはカタツムリの足跡が出来ている。ずるり、ずるり。伸びて行く足跡。

好きなんですよ、ずっと。会いたかったんです、ずっと。大人になるまでずっと会うのを我慢していたんです、誰より好きだから。

ナスなんかよりも好きですよ。勿論、サツマイモよりも好きですよ。ニンジンはちょっと結構競うかな？　嘘です、ずっと好きですよ。お願い、私を見て。もう子供なんかじゃないでしょう？

遠くで畑にしゃがんでる姿。もう本当に歳とって見えるんで、しっかりして下さいよ。

「僕は君よりも十七も歳上なんですよ、そんなピチピチと一緒にし

ないで下さい」
ピチピチって、流石に突っ込みどころを見失いますね。
ホースを伸ばすと、思い切り私はレバーを掴んだ。ほら、雨が降りますよ。癒しの雨ですよ。そんなナメクジみたくしていたら、雨に溶けてしまいますよ。
「ナメクジは雨が好きですよ。理数系が駄目な人間はこれだから、もう」
基本的な生活知識の無い人が、偉そうに言わないで下さいね。台所に麺つゆと砂糖しかない人、私初めて見ましたよ。
ホースをわざとそっちに向ける。雨が降りますよ、お尻を上げて下さいね。
「だって味付けは基本、麺つゆでしょう？」
わざとホースを近付けると、頭に白いタオルを掛けて逃げて行った。長靴が泥を踏み付けて、飛沫を飛ばしながら離れて行く。ホースを高く上げる。
雨が降りますよ。アリさんは避難して下さい。
ねぇ、もうそろそろ諦めて私にしてくれませんか？　歳の差なんて、私は本当に気にしませんから。
懲りずに、ニンジンの間引きの時はまた呼んで下さいね。勝手に間引きなんてしないで下さいね、今回は沢山植えましたから。
またジャングルになりますよ、凄く間引きをしないと大変な事になりますよ。
「好きなんですよ、ずっと」
「何か言いましたぁ？」
「ううん、何でもないですよ」
雨が降りますよ、皆、避難して下さい。虹が出て来ますよ、皆、上を見てて下さいね。
好きなんですよ、本当に。涙を拭いた。

ガラス　ザイク　？

「攻めるのと、受け身なのは、どっちがお好きですか？」
「どっちでも」
飄々と答える彼の傍で、私も微笑みながら返す。
「偶然ですね、私もどっちでも好きです」
爪を研いでいる私の前で、剥き出しの刃を私の頸動脈に当てて彼が笑う。
「まぁ、泣くよりも泣かせる方が好きかな？」
最悪な男、食えない男。内心で吐き捨て、手に持ったグラスの中身を頭にぶちまけたい衝動に駆られながら私も笑うのだ。
「本当に偶然。私もなんですよ」

ガラス　ザイク　？

聞いて下さいよ、泣きながら後輩が言った。またか、呆れて物も言えない。
最近、聞かされるのはこの手の事ばかりだ。私はアンタ達の公式意見箱じゃないんだけどな。恋愛に感(かま)けているんなら仕事してよ。
大体、あれに手を出そうと思う方が馬鹿なんだって。遠くで見るだけにしときなさい、パンダだと思っておけばいいのよ。
遠くで見てる分には、あの小さく鋭い目は見えないでしょ？　そんなものよ。

だから、書類は出来てるの？　は、出来てない？
大きな溜息を後輩へあからさまにぶつけて、分厚い書類をチェッ

クしに腰掛けた。
ヤバい、仕事し過ぎで目が霞むわ。お局とか偉そうなこと言ってんなら、もう少し年寄りに優しくして欲しいんだけど。
どうして知ってるんですか、って聞かれたくないなら誰もが近付く給湯室で話すな。どんだけ毎日トイレに行くのよ、そんだけ化粧直ししたら口紅も一日で無くなるっつーの。

はい、一枚目から誤字発見。
引き出しを開けると一番前に入っているピンクの蛍光ペンで、次々とチェックを入れて行く。
はい、二枚目は突破。
三枚目は、ちょっとグラフ違うじゃないのさ。アンタ、本当に仕事する気あるの？
平行線を辿るグラフにシンプルな付箋を貼った。シャープペンで差し替え注意の文字を書き込む。

失恋で仕事が出来なかったんです、後輩は涙目で訴えてくる。
でもね、この前は金魚だか鯉だかが死んで仕事が出来ないって言ってたでしょ。でも二日後には復活できたから大丈夫よ、アンタは強い。
金魚じゃなくてブルーディスカス？　どっちも魚、細かい事は気にしない。

五枚目。
だからさ、何回言ったらこの部分のグラフを縦にするなって言ったら理解するの？　留め具で会議の時に見え難いのよ。今回の企画会議で勝つ気あんの？
先輩がチェックしてくれるかと思って、なんてお前はアホか。書類の準備に打ち合わせ、会議の進行に取り纏めもやってたら私の寿命が縮むわ。甘えんな。

六枚目、はい突破。七枚目、って七枚目無いけどドコ行った？

だって先輩、絶対に今回も勝てないですよ。絶対に取られますって。って、だから弱気は禁止。

文句を言ってくる後輩を無視して、彼女の机を漁った。ファイルを開いて、引き出しを開けて、最後にはゴミ箱。見つからないよ、もう。

仕方なく画面を開いて、会議ファイルを開ける。はい、七枚目発見。

直ぐにプリント、忘れない内に。文句言ってないで手を動かす！

だからさ。その失恋なんとやらってのは気の迷いだから。相手は恋も何もしてる気全く無しだから。

まずは夕方の会議に全力投球しなさいよ。はい。腕振り被って、思いっきりストレートを投げる！　だからさ、全力投球ってのはなんていうか、例えの表現で。あーごめん、今の忘れて。ちょっと調子乗り過ぎた。

とにかくプリント。付箋部分は差し替え、チェック部分は誤字だから。四時まで全部終わらせて私に提出する様に。

全てチェックしてから会議に持って行くから、それまで会議室にお茶持ってくるように庶務課に連絡入れといて。あ、ついでに私のお茶は少し冷ましてって言っといて。

苛々しながら愛用のカップを唇に運ぶ。ウエッジウッドのワイルドストロベリー。先輩に似合わず、可愛い柄ですね。なんて、後輩が言ってくる。

後であんたのカップ叩き割っておくから、覚悟しときなさいよ。

仕事用の眼鏡の鼻部分が下って来て、指で持ち上げた。省エネするとどうしても汗をかくから、この部分が滑るんだよね。おばあち

ゃんみたいな仕草、リアルで嫌だな。

コストを半分にすると、簡単にその分単価が下がるってスムーズに行けばいいんだけど、そう言うもんでもないのがキツい。今回の企画は、何度もウチの部署が負けている部署と膝を付き合わせなくてはいけないから、絶対に手を抜く事が許されない。

まず企画を社外に出すには、社内のコンペを抜けてからそれが鉄則だ。それにしてもこの企画はどう見ても向こうに分がある様に見えるんだけど、腹が立つなぁ。

先輩！　白髪、発見しましたよ。書類を始めていると思っていた後輩が、まだ横に立っていた。

アンタの頭に修正液ぶっかけて白髪にしてやろうか。そんな暇は無いんだよ。睨み付けた私の迫力に、後輩は画面の前にそそくさと逃げて行った。

それでいいのよ、まず仕事しろ。四時までに書類上がらなかったら、この間の仏蘭西料理をフルコースで奢って貰うからね。覚悟しなさい。一万二千円のコースだからね。

会議ギリギリまで数字と戦う気だった。昨日は残業、一昨日も残業。一昨日はパック中に眠っていたし、昨日は何と風呂に沈んで起きた。いつか過労死するんじゃないかな、私。

先輩、今回勝てますかね？　と、後輩が言った。

分かんない、やるしかないでしょ。　私は書類から目を話さないで答える。

決戦は今日の夕方。さぁ、兜の緒を閉めて法螺貝でも吹きますか！

何？　失恋した相手の話？　今回のコンペ通ったら話し付けてやるから、セッティングしとけばいいでしょ、もう。しっかり教育的指導をしといてやるから。

いい加減、大人なんだから自分の尻くらい自分で拭け。人に後始末させるの止めなさいよ。

次こそは無いからね、解ってる？

ガラスの彼女

「別れたよ」
通り過ぎた車のスピードが速過ぎて、横を歩く彼女の長い髪が翻った。
「え？」
俺は聞き間違いかと横を振り返り、十センチ低い目線を覗き込む。
彼女はまるで楽しいことを話しているかのように微笑んでいた。
振り返った俺の方は全く向かず、とにかく前を向いていた。
少し鼻の天辺が赤いのはきっと冷たい冬の風の所為だろう。赤いファーの付いた手袋を口元に当てて、彼女は「今日は特に寒いなぁ」と白い溜息を付いている。
空気が特に済んだ今日の夜空には、イミテーションなのかという程の星が瞬いて、都会のビルの谷間だというのにまるで田舎の空の様だ。
星が降ってくる。そんな詩的な感想でも言ってしまいたくなる。
微笑みを湛えた顔の前で、彼女が赤い手の平を振った。
「もう無理だった。流石に温厚な私も切れちゃったよ」
「温厚って。お前が言うな」
「いやね。こんなに優しい私を掴まえて」
「お前が温厚なら、俺はマザーテレサだろ」
彼女は「性別違うし、意味分からないし」と噴き出した。
カシミア製の俺のビジネスコートは濃いグレー。手袋も装備な俺の完全防寒体制と、彼女の薄いダッフルコートでは温かさが全く違うだろう。
でもつい十分前「何処かの店に入ろうか？」と俺が提案しても彼女は首を縦に振らなかった。あくまで歩いて帰るのだという、この寒空の中で。
三年付き合っていた馬鹿男と昨日、別れたらしい。

浮気、金に細かい、嫉妬深い。そんな最悪の男だった。ついでに言えば、マザコンで父親とは異常なほど折り合いが悪い男だったのだという。

それでも好きなのだと彼女いない歴数年の俺の前で堂々と言い放った彼女は、今、彫像の微笑み。

この寒空の所為で顔も心も冷え切って凍ってしまったかのようだ。決して長くない足だというのに彼女は一歩前、俺の前を行く。

「駄目だね。人間、心が広くないとさ」

それはお前がその男を許す為の心の広さなのか？　勿論、傷ついた彼女にそんなことを聞けやしない。

正直、そんな心の広さも優しさも大盤振る舞いすること無いんじゃないか。俺は随分と前からそう思ってはいるけれど、思ったよりも感情の出ない表情の所為で助かっている。

それじゃないと、きっと気付かれてしまうのだろう。

「まぁ、狭いよりは広い方がいいわな」

「でしょうねぇ」

間の抜けた俺達の会話。

まさか横を歩く完全安全パイの俺が長い間、彼女を女としてしか見ていないだなんて、彼女は気付いてもいないのだろう。俺はそれを逆手に取って、長い間相談役として傍らに立ち続けている。

低いヒールのブーツがアスファルトの歩道を叩く度に、俺は革靴の足を少し大きめに前へと出して彼女の横へ並ぶべく画策している。隙あらば、その薄い手袋に包まれた彼女の小さな手を俺のコートへと入れてしまいたい気持ちを抑えながら。

空を見上げた彼女に倣って、俺も上を見上げてみた。

幾つものビルの箱に囲まれたビジネス街には情緒も糞もありはしない。もうひとつ、月が遅ければきっとこの素っ気ない街路樹にもイルミネーションが灯されるのだろう。でもまだ少し早い。

彼女の表情を隠せるほどには薄暗い街並みに彼女は上手いぐらいに隠れて、俺はその暗闇に翻弄されている。

大丈夫か、泣かなくていいのか？　そんな言葉を彼女が求めている訳ではないのだという事だけは、長い付き合いで良く分かっている。

俺が求められている意味を、俺は吐き違えてはいけない。

「ま、色々あるさ」

彼女の表情を見ない振りをして、一歩前を行く彼女を追い越す。

悲しみや寂しさ、不安が入り乱れて無表情になっているだろう彼女は、きっとそんな顔を俺が見ることを望んではいないのだろう。長年、交際していた男とは結婚まで話が行っていたのだと言っていた。

それもこれも全て、酒の席での暴露話だ。

彼女は酒が入ると頓にノロケ話をする事が多かった。俺には一種の拷問に近かったけれど、それもまた耐え切った。

そのお陰で当面、彼女のことはよっぽどのことがない限り理性が飛ぶなんて失態を冒すことはないと誓える。

「そう、かな？」

「ま、これからいい事があるかはお前の行い次第だけど」

「そっか。じゃあ、きっとこれからいいことづくめだね」

「かもな。百円位は拾えるんじゃないか？」

「少な！」

傷心につけ込む厭らしさは持ち合わせたくなかった。ずっと見守ってきて、むしろ俺は兄にでもなった様な気になっているのかも知れなかった。

偉そうなことを言ってふざけていても、きっと彼女は俺と別れたその後に声を殺して泣くのだろう。

今のこの空元気も、きっと、こうしていないと涙が零れそうだからなのだと気付いている。

俺の胸で泣けるようにと抱きしめたら、素直に泣く女なら良かった。

きっと彼女は爆笑しながら「らしくない」とブーツのヒールで俺

の革靴を踏み付け、すぐに背を向けて「でもドラマみたいでカッコいいよ」と慰めようとした俺を褒めてくれるのだろう。
俺はそんな彼女に胸を痛め、彼女は俺の胸で素直に泣けないことでまた俺を恋愛対象から外すのかもしれない。少し深読みし過ぎか。
「いっそ、仕事に生きればいいんじゃないか？」
「ちょっと。一度の失恋で私の恋愛シーズン終了ですか！」
「性懲りも無くまだする気か？」
「これからでしょう」
「……はいはい」
呆れた口調に、冷やかな視線。
立ち止った彼女を置いて、歩き出す。少し彼女の口調に違和感を感じながら、それでもそれすら見ない振りをして。
何度、俺は勘違いをして来たんだろうか。
彼女の口調、彼女の行動。彼女の一挙一動に翻弄されて、いつか俺の方を向いてくれるのだとずっと信じていた。いや、そう思いたかった。この長い数年間、傍にいた意味を俺は無理やり彼女に求めているのかも知れなかった。
洗練された行動と、磨かれたたち振る舞い。
そんなこと、簡単に行動できる筈もなく、ただだらだらと離れるきっかけを失っていた。諦めることはどうしても出来なかった。
ずっと付き合っていた彼氏がいて、それでいて相談できる男を傍に置ける彼女は不実なのだと傍から見ると思えるのかもしれない。実際、自分の彼女にもしそんな関係の男がいたら、俺はきっと許すことが出来ないのだろう。
それを良く知っているのに、俺は彼女の傍に立ち続ける。計算高く何でも相談できる気の置けない男友達として。
そして、その肩書きに首を締められる。
「なんかさ、ちっちゃいよね。宇宙に比べたら」
「そりゃあ。お前、随分と大きいモンと比べたな」
宇宙と比べる程に苦しいってか。

立ち止って振り返ると、また彼女は小走りですぐ横を追い越していく。
長い髪。綺麗に手入れされた髪は男の好みだったのだという。そいつに「切るな」と言われると素直に切らないでいる。俺が「切るな」と言っても、きっと彼女は速攻で美容室に走るだろう。俺とそいつの差がきっとそれだ。
「なんかさ。小さいことでグダグダ言ってるのが本当、馬鹿みたいだよね」
この言葉は誰かに言っている訳ではないのだろう。
すぐに分かったから返事をするのは止めた。
無性に横にいる彼女を引き寄せたくなるのはこんな時だ。傍にいるのに何も出来ずに、俺のいる意味を失った時。
彼女が本当に一人で立っている時に、長年積み立てた何かを壊したくなる。
でもそれは、絶対的な男友達という安全圏を失ってまで必要なことなのか。そう思うともう動けなくなった。
「スッパリ、何もかも終われたらいいのになぁ」
声が震えるのが聞こえて、俺の指が持ち上がる。
ここまで来て、まだグダグダ言っている自分こそスッパリぶちのめしたくなる。長い時間、見守ってきたガラスの彼女を割れてしまうのも覚悟で手を出すか。
俺の中ではまだ結論が出ない。小心者なのだと、友人が言った。男らしくないのだと、自分も思う。
でも、男らしいというのは一体どういう事なのだろう。失敗を恐れずに何もかもぶつかっていくのが男らしいというのであれば、大半の男は男らしくはないのだろう。俺の知っている男の大半は情けないことでグダグダ悩み、小さなことでよく立ち止っている。
聞いてしまおうか。
今、俺はどんな事で彼女に求められているのか。傍にいるだけなら、何も俺じゃなくてもいいんじゃないか。俺じゃなくちゃいけな

い理由は何だ。
残業だった仕事中に入っていた短い彼女からのメール。話したいことがある。そう言われても、愛の告白じゃないことくらいは流石の俺の頭でもよく分かっている。
それでもどうしようもない時に、頼ってくる明確な理由を知りたかった。
二歩前を行く彼女と、少し後ろを歩く俺の姿は道路を走っている車の運転手にはどう見えているのだろうか。緩いカーブでスピードを落とさずに擦り抜けていくのは、美しく磨かれた赤い車。
彼女がその車に顔を上げるのを見逃す事も出来ない。赤くて少しうるさい車、つい先日まで助手席に乗っていた車を彼女は思い出している。
長く白い溜息。今が冬だから、彼女の吐息は白く彩られ表情や口調よりも雄弁だ。
「さ、帰ろっか。もう寒くなってきちゃった」
「だからどこか入ろうって言ったのに」
俺の恨み言に彼女は「本当だよね」と笑う。それでもこれから入ろうとは絶対に言わない。
俺はそれを言ってしまいたいのを堪えて、でも何もかもを飲み込んでしまう訳にもいかずに手の平を彼女の小さな頭に乗せてみる。
思い切り優しく撫でて仕舞いたい衝動を抑えて、無理に乱暴に振舞う。
掻き交ぜる彼女の長い髪。
「うわ！　止めてよ！」
お前は可愛いよ。ずっと見てたんだ、自信持っていいよ。俺が保証するよ。
俺は何もかもを口に出来ず、最後の仕上げに軽くその頭を小突く。
無茶苦茶に強く抱き締めて耳元でそんなことを言えば、きっと行き場のない俺の想いだけは終着するのだろう。でも、そんな俺の重過ぎる想いを受け止めると彼女はきっと戸惑って、知らずに俺を傷

付けた自分の振る舞いを責めるに違いない。
だから今は、ガラスの様なその繊細な彼女の心を黙って見守ることしか出来ない。
奥歯を噛む。彼女が横に並んでも、今は追いつかれたくない。少し速く歩こうか。

恋愛査定

伸びてきた手を振り払うと、驚いた表情をされた。
大きく聞こえるようにわざと溜息をつくと、私は用意していた言葉を唇から漏らす。よりその言葉が残酷に聞こえるように、ずっと練習してきた。

「もう、別れたいんだけど」

想像していた通りに彼は驚いていた。
大きな体。
少し長めの柔らかい髪は、癖があって軽くうねっている。日の光に当たるとそれは透き通った金色に見える程、彼の色素は薄い。
大きな瞳をこれ以上も無い程に見開いて、彼は無表情を装っている私を見ている。
彼のことを何と形容したら一番しっくりくるのだろう。そう考えると、思い浮かぶのは大型犬だった。しかも、ドーベルマンの様な端正で精悍な感じではなく、飼い主を見ると尾がちぎれるのではないかと思う程、人懐っこいゴールデンレトリバー。
私が傍にいる時は、彼は尾でも持っているのではないかという程の従順ぶりを見せる。
戻ってくる彼の反応が鈍すぎて、私の声が聞こえているのか不安になった。
彼の茶色い瞳の中に、睨み付けている私が映っている。余りに自分勝手な顔をしている彼の瞳の中の私は、憎んでいるかと思う程にきつい表情をしている。

「ね、聞こえてた？」

畳み込んだ私の声に、彼は大きく顔を歪める。
見た目が柔らかく温和な空気を纏っている割にしっかりと鍛えられた彼の体はシャツに覆われている。ラフに着こなしたそのシャツは、前に私がプレゼントしたものだ。彼はそれを凄く気に入っていて大事に着ている。
泣きそうだ。
彼の顔を見て、そう思う。
その顔を見ると、これ以上もなく傷付けたという後悔が押し寄せてくる。

「……いやだ」

私よりも年上な癖にずっと幼い言動を彼は返してきた。
いつの間にか私の前で正座をして、その揃った膝の上に両拳を並べている。小刻みに震えているその拳。
それを見て、大袈裟な溜息を吐く。
聞き分けのない子供を叱る母親のように、私は前髪をかき上げた。

「いやだって言ったって、もう決めたの。仕方ないじゃない」
「……俺はいやだ」

私だって、そんな簡単に決めた訳じゃなかった。ずっと考えていたことを、やっと決断できただけだ。
何もかもを嫌いだった訳じゃないし、かと言ってずっと傍にいられる程にも許すことも出来なかった。だから、決意したのだ。
顔を上げて、彼は私の顔を覗き込んでくる。
その瞳にいい加減な気持ちは全く見えない。私のことが好きで好きで仕方ない。ただ真摯な気持ちをぶつけてくる彼の姿を見て、私は奥歯を噛んだ。
その真っ直ぐな瞳は私の奥底を読み取って手を離すことを躊躇さ

せてしまうから、眼を背け見ないようにした。

「いつもなら空気読んで、そうだね、とか言うじゃない。今回だけはどうして私の言うことを聞かないのよ」

「……だって、それとこれとは別でしょ」

泣き声の様な掠れ声。

床に投げ出した私の手を握ろうとした彼の指を、私は乱暴に振り払う。

「触らないで」

きつい私の声に、俯いた彼の髪がさらりと下に落ちた。

大きな体なのにね。私はしょぼくれた大型犬の様な彼の頭頂部を見下ろして、震える呼吸を必死で抑える。

彼の部屋のテレビではバラエティが流れている。付き合ったばかりはいつも二人で見ていたテレビ番組、最近はいつも私一人で見ていた。それが当たり前になっていた。

彼の部屋に来たのはいつぶりだっただろう。

もう最近は電話かメールだけの生活が続いていた。メールでも電話でも、決して隠そうとはしないダダ洩れの私への気持ち。それを苦しく思うようになったのはいつからだっただろう。

優しい、優しい。とにかく優しい彼。

私を真綿で包む様に大切にして、慈しんでくれる彼。彼と一緒にいると私は壊れやすいガラス細工にでもなった様な気がしていた。

彼と同じ場所にいると息が詰まる。

「もう、会わないから。今までありがとう」

私は俯いた彼を構わずにその場を立ち上がった。

一歩、足を進ませる前に彼の指が私の長いスカートを掴む。

「……俺は、絶対にいやだ」

無言でスカートを引いた私の顔を見上げて、彼はもう聞こえない程の掠れた声で訴えてくる。

彼の人差し指には大きなシルバーの指輪。シンプルなそれを見てから、その長い指に絡んだ私のスカートを見詰める。絶対に離さない、彼の指はそう言いたいかの様に強く掴んでいた。

「いやだよ」

何か答えようと考えている私が口を開く前に、彼が私の投げ出した手を掴んだ。

大きな手の平で包む私の手。

彼の手はいつも冷たいけれど、今日に限って少し私よりも温かい。覚悟を決めていた筈なのに、その温かさに泣きそうになった。

「どうしたの？　何かあったの？　俺が、何かした？」

彼の手の中で強く拳を握り締める。

優しい声と優しい仕草。彼が立ち上がって私の傍らに立つと、私の頭は彼の肩までしか来ない。苛立つ私に触れるのを少し躊躇して、彼は私の肩へ手を伸ばす。

少し屈んで私の顔を覗き込む。

泣きそうな顔をしているのは彼だ。一方的に私は彼を傷付けているというのに、彼はあくまで私を気遣っている。目線を合わせない私を少し訝っているのかもしれない。

「言いたいことがあったら言って？　俺が出来る事なら何でもする

から」

だから、別れるなんて言わないで。彼の言葉はきっとそこまで続くのだろう。

どんなことをしても、もし自分を曲げるのだとしても、彼は構わない。

彼は私にすっかり傾倒している。髪の先から爪の先まで、全て私の何もかもを大事で仕方がないらしい。

馬鹿みたい。私は心の奥底で吐き捨てる。

「何か出来ることがあったら、別れようなんて言わない。もう無理だから言ったの」

抱き締めようと伸びた腕に気付いて、私は彼の胸を押した。

呆気なく彼の体は私から離れていく。本当に呆気なく、それを私は悲しく思う。

唇の震えに連動して、頬が歪んだ。ずっと考えてきたこと全てを言ってしまった。私は置いてけぼりの子供になってしまった彼から一歩、離れる。

彼が顔を上げた。

私が離れたことに、ショックを受けたみたいだった。

「じゃね」

背を向けて二歩目を出す前にその距離を縮められる。

「……ま、待って！」

それでも敢えて気にせずに、私は玄関へと足幅を広くして歩いて行く。後ろから追ってくるのは彼の足音。

ずかずかと歩く私に遠慮して最初は一歩一歩と、本当に振り返りもせず帰ろうとする私に焦りを感じたのか、彼は壁に手を突き、走る。
無駄に広い彼の部屋は、独身にしては大き過ぎる作りだ。長いフローリングの両側には部屋が三つもある。
付き合ったばかりの頃、彼は恥ずかしそうに「部屋は一つしか使ってないんだ」と言っていた。いつか、彼と一緒に住むことがあるならば部屋にだけは苦労しないのだと私は心の奥でそう思っていた。
夕方のリビングには赤い夕焼けの光が射し込んでいる。
窓の無い玄関へと向かう廊下にも赤い光。伸びる影が近付いてくる。

「い、いやだ！　帰らないで！」

手首を掴まれて、引き寄せられる。
真剣な瞳。らしくなく焦るその態度に、私は折れてしまいそうになるのを耐えなくてはいけない。
掴まれていない方の手で、手首を拘束する彼の指を外そうとする。でも、優しい彼にしては珍しく私の手首が赤くなる程に強く握り締めている。勿論、彼の拘束は外れない。
これが最後の攻防だ。

「さっきからそればっかりじゃない」
「……だ、だって」

引き寄せて抱き締めていいものか、彼はそれを悩んでいる様だった。

「私の話は全部終わったの。帰るから、離して」

毅然とした私の声に、彼は俯いてしまう。
小さな声で「いやだ、絶対に離さない」と聞こえて、私は腕を引いた。そのまま、彼の腕が付いてくる。
私たちは仕事が忙しくて、ずっと会えなかった。寂しかったけれど、でもそれが別れの決断に結びついた訳ではない。
だから彼にとって私が別れを切り出したことは青天の霹靂だった筈だ。私たちは表面上は上手くいっていた。
彼は私を愛し、私も彼を愛していた筈だった。でもそれが私には苦しかった。

「何か直すところとかないの？　俺が悪いなら、何でも言ってよ」

最後の方は、もう声にもなっていなかった。掠れ声で「別れたく……ない、んだ」と続き、強張る私の体を抱き締める。優しく、これ以上もなく優しく。
私はその腕の中で泣き出しそうになったのを必死で堪える。
柔らかい彼の髪が私の肩に乗った。吐き出しそうになった罵声と共に唾を飲み込む。
愛おしい。胸一杯に広がる愛おしさと同時に、どす黒い苛立ちが胸を覆う。優しさを受け止める私の心はもう飽和状態だった。
歪む顔。

「止めてよ、もう嫌なの」

私の言葉の後に、背中に回る腕が少し強くなる。

「離して。帰るから」

背中で彼が拳を握り締めたのが分かる。
悔しさに奥歯を噛んでいる。その悔しさを彼は自分に向けている。

私の心の変化に気付けなかった自分を責めて悔やんでいる。
出来るだけ優しく、彼の体を押し退けた。少しずつ離れる私の体を惜しむ様に、彼の視線が私を見る。
微笑んで見せる。その顔を見て泣きそうな顔を浮かべる彼で、私は僅かな喜びも感じている。

「ばいばい」

そう告げると、彼の体が動いた。こんなに速くこの人が動けるのだと初めて知った。それくらい速かった。
一度離れた手首を引き寄せて、強く抱き締められる。背骨が軋んで、嫌な音を立てる。
付き合ってから何度も彼は私を抱き締めてくれたけれど、こんな乱暴に抱き締められたことなんて一度も無かった。彼は私をまるで深窓の令嬢とでも思ってるのではないかという程に優しく丁寧に触れていたから。

「……一、ヶ月」
「は？」

良く聞こえなくて聞き返した私の耳元で彼は私を抱き締めたまま、もう一度同じことを言ってくれる。
泣きそうな声で。実際泣いていたのかもしれない。

「一ヶ月、待って。それまでに……覚悟、するから」

馬鹿な提案だと思う。
別れるまでの猶予期間をくれと彼は言っている。
別れる原因を何も聞いていない以上、私が心変わりした可能性だって捨て切れないというのに、あくまで彼は自分の心の準備期間と

して提示してきた。
私がそれこそ別れを撤回するのだと思ってなのか。それはきっとない。彼は私の頑固さを知っている。一度言い出すと聞かないことも、反対しても意味がないことも。

「それまで今まで通りの関係を続けるってこと？　それこそ私には無駄な時間じゃない」

苦笑した私の首元で悲痛な囁き声。

「ごめん。でも、すぐに別れるなんて、俺には……出来ないよ」

悪女を気取りながら、鼻で笑う私。
そんな私の体を抱きながら、彼は「好きだ」と言った。何か言ってやろうと口を開いた私の非情さなんて見えていないかの様に彼は何度も「好きだ」と繰り返す。

「好きだ。好きだよ。別れるなんて嫌だ。俺は、嫌だよ」

どうしたらいいのか、分からないんだろう。実際、彼が一番望んでいるのは私が別れを撤回する事なのだし。
でも私は何を言っても別れを撤回しようとはしない。
私に愛を告白する度に背中の腕は強くなって、呼吸すらもままならなくなった。
愛の告白は次第に私の名前の連呼となり、声は聞こえない程の掠れ声になる。
名前を呼ばれる度に苦しくなる。それは今も変わらない。優しいこの人が私は好きだっだのだし、彼の優しさを美徳なのだと思ってもいた。
でも、私は我儘だった。誰よりもきっと我儘で自分勝手だ。

「一ヶ月で何が出来るの？　きっと、何も変わらない」

吐き捨てた私の耳元で彼は「変わるよ、だから待って」と言った。私が頷かない限り、彼はその手を離さないだろう。

「覚悟に一ヶ月も掛かるなんて、本当どうしようもないわね」

意地悪なことを言って私は彼の肩に顔を埋める。

彼の腕が私の頭の重みに安堵したようにまた強くなって、私は泣きそうになった。

恋愛査定　2

あんなに大きな体なのに、彼は少し可愛らしいものがとても似合う。

例えば大きめのパーカー、だぼっと体を包むそれを着て床に座り込む彼は柔らかい髪も相まってまるでぬいぐるみの様だ。

膝の間に広げた写真は彼の作品。犬や猫、それに鳥や子供たち。彼の作品には愛情が溢れている。

どんなに苦しい時も悲しい時も、カメラを持っていさえすれば気が紛れるのだと言っていた。もしかしたら彼はそれをする事で自分自身の感情に蓋をしているのかもしれない。

溢れる自然や淡々と進む毎日への愛情。変化のない毎日の中に光と希望を見つけて彼は切り取っていく。そして写真に閉じ込めていく。

水滴がこんなに綺麗なものなのだということを、私は彼の写真で知った。日の光が線となって落ちてくる真実。人の顔がこんなに美しく見える瞬間。

何よりも私が、私自身がこんなに幸せな顔をして笑うという事実を私は初めて彼の写真で知った。

◆　◆　◆

最初は目的無くふらりと入った。初めての彼の個展は閑散としていた。

ガラス張りのビルの一階は、花に飾られて日の光も入っているのにどこか冷たく感じる。そんな何も変わらないビルの前で私が立ち止ったのは、その奥の明るさにだ。

無機質なビルのロビー向こうには、生命力溢れる一角があった。

それが、彼の個展だ。

通りすがりのひやかしが二人、写真を眺め個展から出て行った。
彼はそれを満面の笑みで見送り、個展の入り口で足を止めている私を見た。丁寧な仕草で「気軽にどうぞ」と促してくれる。
無表情で、私はその愛想のいい彼を見る。
入る気満々だったというのに、私は何か一言言わないと気が済まない。可愛らしくない性格だと、よく言われた。
先程の客以外誰もいなかったらしい。こんな通りすがりにまで話しかけて来るとは彼は余程暇だったのか。それとも、入るきっかけを失っていた私にまで気を使ってくれているのか。
どちらにしても人がいい。

「あまり知られてないのね」

そう言った私に彼は恥ずかしそうに「初日はそれなりに来るんですよ」と律儀に応えてくれる。

「ふぅん、こんなに綺麗なのにもったいない。もっと宣伝したらいいのに」

一枚、入口に飾られた花と子供の写真を見下ろした私の心からの偽りない言葉に、彼は崩れそうな微笑みを浮かべる。
その時の彼の服装は体に少しぴったりと寄り添った黒いカットソー。私は彼を見ながら、柔らかく温和な空気の彼には似合わないチョイスだと思っていた。
彼にはきっと柔らかい色のシャツが似合う。色素の薄い彼の髪を引きたてて、きっとそれは彼の顔を彩るだろう。より一層、優しげに儚く見せるだろう。
初めて彼の個展に入った時は、退屈していたのもあってしっかり二時間も滞在することになった。
一枚、一枚。写真に愛情を持って説明してくれる彼との話はとて

も楽しかった。端正な見た目の割に彼は写真を取る為には自分自身に頓着らしい。

「……気付くと食事も睡眠もつい忘れてて」

会話の全てが微笑みと共に向けられる。

私の顔よりも随分と高い彼の視線、彼の顔が間近にあったのなら私はすぐにこの個展を飛び出していただろう。

そもそも余り人と接するのが得意な方ではない。

「人間として最低ランクね、生きるのすらギリギリじゃない」

対する私は笑いもせず、少し見慣れない彼の様な人間に警戒すらしていた。

彼の優しさは正直、恋愛に疎い私には酷だ。

少しある段差の前で、彼は自然に私の前にその大きな手の平を出し、彼の真意が読めなかった私は訝しげな表情を向けた。

自分のしたことに気付いて、彼は頬を赤らめながらさっと手を戻す。柔らかそうな髪に指を入れて、彼は俯くと苦笑している。

聞き取れない程の小さい声、私なんかよりもよっぽど彼は女らしい。

「ここにはおばあちゃんとか高齢の方が結構来てくれるんだけど、結構その段差で躓いたりするんです」

つまりは私もその高齢の人と同じ扱いなのだということだ。

私は呆れ顔で照れ隠しなのか、少し前に行ってしまった彼の背中を見詰めた。

微かに見える耳が赤い。この短時間でも分かる程、過剰に照れやすい彼はきっと今までかなりの人間に無意識ながら気を持たせて、

それに驚いてきたのだろう。
こういうのを天然、と呼ぶのかもしれない。彼の持つ過剰な優しさは残酷だ。
でもこの純粋さがこんな美しい写真を生み出すのだと言われれば分かる気がした。彼の見る世界は美しい。美し過ぎた。
一際大きな写真の前で、私は立ち止まる。
写真の鮮やかさ。その瞬間、胸がざわめいた。不安、希望、絶望、混ざり合うのはこの一瞬を切り取った彼の気持ちを感じているのか。
大きな鳥が空を飛んでいる。遠く離れた世界な筈なのに、羽も嘴もはっきりと空の青に浮かびあがっている。
私はそれを見詰めた。

「初めて眼鏡を掛けた時に似ているのね」

立ち止って言った私の言葉に彼は振り返る。
彼の方は見ないまま、私の視線は写真に釘付けになった。
大きな写真の大半は空だ。
なんてことない写真だった筈だ。誰もが大空を飛ぶ鳥の美しさには心を奪われて沢山のアングルで撮っている。青とそれを切り取る鳥の対比、どこを取っても珍しい構図ではない。
それでも、その鳥に心奪われてしまう。

「私、小さい頃から眼が悪かったのね。だから、輪郭のぼやけた世界が本当の世界だと思っていたの」

私は今、眼鏡をかけていない。高校を卒業して、私はコンタクトにして新しい世界を手に入れた。
それでもあの全てが明確に見えたあの一瞬のことを覚えている。
世界は美しい。見慣れた空も雲も、空気でさえも。触れる全ての物がはっきりと見えた時、私は凄くそう思った。

彼が撮ったのだという写真に一歩、近付いて眼を細めた。
眩しいのは総ガラス張りの窓から入ってくる眩しい日の光の所為じゃない。写真から見えるその明るさに、私は眼が眩んだ。

「こんなに綺麗に空を飛ぶ鳥もいるのね。いつも空を見上げているのに、空を飛ぶ鳥なんて見慣れて何とも思ってなかった。眼鏡を初めて掛けた時、確か何もかも一瞬一瞬が美しいのだと、私は気付いた筈なのに」

いつしか、私はその感情を忘れてしまっていた。
仕事の忙しさにかまけて、胸を打つ全てのことを見ない振りしていた。
通勤時には大好きな曲を聞き続け、自然の音に耳を傾けることを忘れてしまう。耳から拒絶すると、通勤時間は格好の睡眠時間か、読書時間になってしまう。
眼の前で通り過ぎる風景は、その時を終えると二度とは戻って来ない。
私は毎日の暮らしでそんな簡単なことを忘れてしまった。

「また少しの間は、鳥が綺麗なのだと思えるのかもしれない」
「……嬉しいです」

私の称賛が真実の言葉なら、それに返してきた彼の言葉もまた真実だった。
写真から眼を離し彼を振り返ると、彼は眩しそうに私を見ている。
変な語りを入れてしまった。その時初めて気付いた。
途端に恥ずかしくなった。

「もう、帰る」

この個展に入ってから、実に二時間も経っている。
その間、客は現れない。もしかしたら個展の奥でたった一人の客を相手にしている主を見て忙しいのだと踵を返してしまったのかもしれない。
胸に抱いた大きな革バッグを腕に下ろし、私は出口へと歩みを進める。
素晴らしい時間をくれた彼に挨拶をしていなかったと気付いて、頭を下げた。

「今日はありがとうございました。頑張って下さい」

写真がもしポストカードにでもなっていたら一枚くらい、今日の記念で欲しかった。でも入口の小さな机には何も載っていない。この出会いを、このままにしておきたくはない。
彼との時間は、今日初めて会ったのだとは思えない程心地よいものだった。
白い紙が束になって置いてある。写真が何もプリントされていない、簡素な紙。名前とこれからの個展のスケジュールが箇条書きで書かれている。
手を伸ばすか否か、悩んでいると小さな笑い声。

「それ、持って行って下さい」

彼の声が背中で聞こえて振り返る。
少し離れた場所で、彼は恥ずかしそうに「次の予定なんです」と続けた。

「もしよければ、また遊びに来て下さいね」

ガラス張りの窓から射し込んで来るのは赤い夕焼け。無機質だっ

た個展会場は燃え上がった様な色に染め上げられている。
その中で、彼が微笑んでいる。人好きされる優しい笑み。
私はこの人の微笑みが苦手だ。この出会いが特別なのだと、勝手に勘違いしてしまいそうになる。
でもきっと彼はそんな私に気付いてもいないのだろう。また来てほしい、という言葉はこの個展に来た誰にでも言っている。私は客だ。
ふと見下ろしたスケジュールの最後に書かれた彼の経歴は私の想像を絶して、素晴らしいものだった。
沢山の賞を取って、幾つもの個展をこなし、本の表紙を飾ったこともあるらしい。個展に入る前の私の言葉を全て彼の脳裏から消してしまいたい。
むしろこんな場所で個展を開くこと自体、彼には珍しいことなんだろう。
私はどうかえしたらいいのか思い付かず、無言で頷き、その紙をバッグの外ポケットに乱暴に入れる。
背中を向けると、先程のひやかしの客へと向けた様に丁寧に彼は見送ってくれた。
私は、特別なんかじゃない。彼は誰にでもそうなんだ、そう思うと先程までの感動も全て色あせる気がした。
それなのに、また彼の写真を見たくなった。
最初に感情を持ったのは、私の方だ。
それが始まり。

恋愛査定　3

私の携帯電話が鳴っている。
しばらく待っても止まらないその震動を見詰めながら、私は溜息をついている。
毎朝の日課だったメールも昨日の朝から途絶えていた。私はそれを少し悲しく思いながら、それでも少し安堵していたのに。
仕事から帰ってきたばかりの私は、まだ通勤していた服から部屋着へにも着替える前だ。
ストッキングだけを脱いだ私は結い上げていた髪を解き、テーブルに放り投げられていた鳴り止まない携帯電話を取った。
通話ボタンを押す前に、一度深呼吸。
声を鋭く、とにかくそれを心掛ける。

「はい」

返事はすぐには戻って来ない。向こうで聞こえるのは風の音、それに微かな雑踏。もしかして彼は今、外にいるのかもしれない。
しっかり一分間待った後に、私は大袈裟に溜息をつき「切るよ」と電話向こうへ吐き捨てた。
慌てたのか、大きな物音が聞こえる。
その後に、通話口に縋り付くような彼の声。

『……ま、待って！　切らないで！』

割れる声が飛び出す携帯電話を耳から離した。
悪戯電話を装った子供か。そう怒ってしまおうか。
電話向こうで慌てた声の彼は、無言の私に恐れをなしているのだろう。切り出す言葉に悩んでいるのか。あの、だとか、ええと、だ

とかを繰り返す。
電話をしながら彼は正座をしていんだろうな。容易に予想できるのがおかしい。
そんな不審な彼を待ちながら、来ていたブラウスを洗濯機に投げ込んだ。顔を上げれば、余り豊満とは言えない胸と骨ばった鎖骨が洗面所の鏡に映っていた。
そんな情けない体を見たくなくてその上にカットソーを着ると、苛立ち紛れの声を上げて見せる。

「だから、用事はなに？　もう切っていい？」
『……ごめん。あの、どうしても……声が、聞きたくて』
「じゃあ、もういいでしょ？　切るよ」

バッサリと切り捨てた私の声に、彼は私の名前を切なく一度呼んで、黙りこくった。
声が聞きたいなんて、自分の我儘を口に出すのは彼には珍しいことかもしれない。これまで彼が、私へ何かを強制したり望んだりしてきたことはなかった。
暗闇の部屋に電気を付けて、乱暴にカーテンを締めた。
ベッドに体を投げ出すと、埃が立つ。そろそろ休日が来たら、掃除機を掛けて、本格的に掃除をしなくてはいけない。
最近、そんな簡単なことすら考えるのが億劫だった。疲れとストレス。ずっと胃薬が手放せなくなっている。
遠慮がちな声。彼が唾を飲み込むと、音が聞こえてくるようだ。
こんな時まで彼の声は優しい。

『……会いに行っちゃ……駄目？』
「駄目。もう寝るから」

勿論、嘘だ。

残業を終えて、部屋に戻ってきたのはたった五分前。私はまだ夜の食事もしていない。
リビングテーブルに置かれたコンビニの袋。今日は炊事をする気分にはならなかった。
会いたくない、それが理由。会ったら絆されてしまう。
『少しで、いいんだ。あの、五分。嫌なら一分でも、いいから……！』
珍しく彼は食い下がってくる。言葉も絶え絶えにどもりながらだけど。
たった一分だけ顔を見て、それが彼の何を満たすんだろう。
私は「今日は疲れたの」と言った。それはあながちウソではないから、きっと彼は納得してくれるだろう。そう、思っていた。
どんどん嘘が上手くなっていく。
私は腕を閉じた眼の上に乗せる。伏せた瞼の当たっている腕が濡れて熱くなっていく。
この電話で疲れ切った私は、既に何かを食べる気すら失っていた。電話を切ったら、このまま眠ってしまいたい。
化粧を落としていない私の肌はきっと明日散々たるものだろう。それでももうベッドから一歩も動きたくなかった。
彼は私の名前を掠れ声で呼ぶ。
泣き落としで勝負をしたら、彼に私が勝ったことは一度としてない。
私は泣いたりしなかったし、彼は上手に私の琴線を鳴らす。その情けない声を聞いて、早くも私の心は悲鳴を上げていた。
少しぐらいならいいじゃない。
駄目だ、そんな簡単に折れては元の木阿弥だ。私は強くなくてはいけない。

『……会いたいよ』

彼の泣き言が聞こえてくる。

閉じた瞼裏に見えるのは、項垂れた人懐っこい大型犬。

柔らかいその髪は俯いた彼の頬を隠し、情けないその顔を誰にも見せないようにしている。

しっかりしなさい、男でしょ。すぐに丸まってしまう彼の背中を思い切り叩いてやりたい。私がいなくても、彼は立ち上がることができる筈なのに。

これ以上はないという程切ない声で響く、決して珍しくない私の名前。

彼の唇から洩れる私の名前が何故ここまで切なく響くのか、本当に理解不能だ。

大きく溜息をついた。

見上げた部屋の蛍光灯はもう切れそうなのか、たまに短く点滅している。まるで虫の飛び込んだ街灯みたい。詩的なことを思って、私は笑った。

今日はもう残酷な言葉を吐かずに、会話を寸断させてしまおう。

「おやすみ」

何かを彼が言う前に、私は素早く切断ボタンを押してしまった。

そのまま電源を切ると、また眼を閉じる。

彼はきっと、切られた携帯電話を持って私の名前を呼ぶのだろう。そして慌てたまま着信履歴を探して、電話を掛け直そうとするに違いない。

でも、私からの着信がここ数カ月無いのに気付くだろうか。

「……読み易い人」

それなのに、誰よりも不安を煽る人。
互いに忙しい時、久し振りに会った彼はいつも私を見て嬉しそうに表情を崩す。
それ程に優しく触れるのなら私は壊れたりしないのに、彼は怯えながら指で私の頬を撫でる。
手の平で私の頬を包み込むと、やっと傍に私がいる実感が湧くのか。ゆっくりと私の背中に腕を回す。
好きだよ、好きだよ。大切だよ。ずっと傍にいて。私に向けられるのは、絶え間ない愛情の言葉。キスをする時でさえ彼は啄ばむ様に触れて、怖い程。
私がもしいなくなったらどうなるのだろう。私はいつもそれを見て不安に思った。
一体、私の何が彼の心を捕らえたのだというのだろうか。向けられるダダ洩れの愛情を感じながら私はいつもそう思う。
片や世界に認められつつもある写真家と、片やどこにでもいる会社員。
出会いは偶然で必然なのだと彼が言った。私を抱き寄せる時、彼は私に全身で甘える。
歳上の彼。それなのにずっと歳下なのだと勘違いしてしまう。
料理をしながら話していると背中に感じる彼の体温。包丁を持って危ないのだと文句を言うと「久し振りに会ったから」と言い訳をして離れない。
一体何が、ここまで彼の心を射止めるのか。
私は自分が美女ではないことを知っているし、彼が優しく扱う程に華奢ではないことも知っている。
それを知らなくては、私は自分に自信すら持てないのに。

◆　◆　◆

「何で、いるの」

苛立った私の声で、背中を向けた彼が飛び上がる。
会社から少し離れたガードレール。大きな体をより一層縮こませて、彼は大きなコートを羽織り、寒空を見上げていた。
会社の玄関から出た私を見つけた時の嬉しそうな顔。
彼の口もとから流れ出る白い息が、強い風が吹くと一瞬で消えていく。
別れよう、と私が言った現実を、彼はその芸術面のみに発揮される複雑難解な脳味噌では記憶出来ていないんじゃないんだろうか。
私が電話を一方的に切ったのは、二日前のこと。それなのに舌の根も乾かぬ内に、とはこういうことかもしれない。
集中し始めると食事も睡眠もおろそかになるのだと、会ったばかりの時に彼は言っていた。きっと何も考えてはいない。
千鳥格子のコートのポケットから手を出すと、眼の前で投遣りに振ってまるで犬を追い払うように私は言った。

「帰りなさい」

実家の飼い犬へゲージを指差しながら「ハウス」という時に似ていると一瞬思う。
今日の彼はカーキ色のコートを着ている。やっぱり彼の服装は何年経ってもらしくない、まるで大きなゴミ袋みたい。
彼は俯いて、それでも私の言葉を拒絶する。

「……いやだ」

今日の仕事は確か私が覚えている限りでは、遠方だ。
写真を撮りに遠方へと行くだけではなく、彼は沢山の出版社と契約しているから新幹線での行動が多い。
きっと宿泊を勧める取引先に首を振って、彼はとんぼ帰りしたん

だろう。彼の足元に転がる荷物の多さでそう分かる。
ガードレールから腰を上げた彼は、俯いてただ項垂れている。
それを見ながら、呆れ顔を取り繕った。

「いい加減、疲れてるんでしょ」
「……大丈夫」

彼が首を振った。柔らかい髪が揺れて乱れる。
そんな訳ないじゃない。そう呆れる私の後ろで、短い空気音の後に玄関が開いた。
会社の玄関先で立ち止ったまま振り返った私の後ろを「お疲れ」と同僚が足早に過ぎ去って行く。
擦れ違い様、少し離れた場所でこっちを向いている彼へ同僚は驚いた表情を向けた。それでもそのあと、何も突っ込もうとはせずに逆方向へと帰って行った。
もしかして彼は不審人物かと思われたのかもしれない。少し離れた場所で俯く彼の顔は見えないから。
明日の追求が面倒なことになりそうだった。きっと面白半分の噂が流れるに違いない。最悪だ。
もう完全に背を向け離れてしまった同僚へ一応「お疲れ」と返すと、私は憂鬱な気分になりながら軽く上げた手を降ろす。
視線を戻し何度目かの溜息をつくと、彼は大袈裟に怯えていた。
こんな付き合い始めの女みたいな真似、今までしたことがなかったから、自分の行動にどうしたらいいのか分からないようだった。
無意識の行動だ。これだから感覚派の人間は困る。

「……場所を変えましょう」

立ち止まる彼の横を、出来るだけ大きく足幅を取りながら抜き去る。

小刻みな足音の後、彼が後ろを追いかけて来たのが分かった。身長の高く足の長い彼は呆気なく私の横へ並んでしまう。
不快な表情を敢えてしているのに、それでも嬉しそうにそんな私の顔を覗き込んできた。
勿論、私が彼の顔を振り返ったりすることはない。私はただ前を向いたまま、歩いている。
彼が覗き込む度に、女物の香水が鼻を擽るのが嫌だ。甘い、それでいて少しパウダーっぽい匂いに眉を寄せた。
数歩、歩いた時だ。
一瞬、氷が指に触れたのかと思ってしまった。もしくは、雪でも降ってきたのかとも思った。
振り返り見下ろすと、ポケットに入れず投げ出したままの私の指におずおずと彼が触れている。
先程まで屋内にいたとはいえ、寒空に出したままの私の指でもはっきりと分かる程の冷たい指。一体どれほどの時間を寒空の下で待っていたんだろう。
彼は、本当に馬鹿だ。

「触らないで」

私は指に絡んでくる寸前のそれを振り払い、もう二度と触られない様に両手をポケットへと隠してしまった。
強い風の向こうで、彼が「ごめん」と呟いている。
聞こえない振りをしてしまおう。私は毅然とした態度を決して崩してはいけない。
大幅の歩調のまま、気丈な表情を崩さず前を向く。正直、競歩並みの速度を保ちながら大幅の足幅で歩くのはかなりの疲労を伴っているけど、表情には出さずに。
凍りついた表情に反して、簡単に上がって行くのは私の呼吸。

「こういうのは困るのよ。迷惑なの」

上がった息の隙間を探しながらも、強く言った。

彼はそんな苦しそうな私を心配しながらも、どうしたらいいのか分からずおろおろしている。

「会社の前にまで来るなんて、ルール違反だわ」

いつどこでそんなルールなんて決めたのか。

言いながら、我ながら訳のわからないことを言っていると思う。

「もう、会いに来ないで」

「いやだ」

彼が途端に声を張り上げた。

ついさっきまでおろおろと困惑していた彼は、顔を上げてこちらを見ている。

言い返しが逆鱗に触れた私は、すぐ立ち止って彼を睨み付けた。

二歩、私から離れた場所で同じ様に立ち竦む彼は、今にでも私を抱き絡めてしまいそうな表情をして怒り狂っている私を見下ろしている。

こんなことを言っている私に怒ってくれたらいいのに、彼はただ悲しそうな瞳。心細さと愛しさの狭間で私を手離すべきか揺れている。

彼は私の顔を見下ろして、何か言いたげに唇を開いた。でも、やっぱり閉じた。

私は、整った眉を寄せて顔を赤くして、何かを耐えている彼の顔を見上げていた。

私の中で吹き荒れる嵐を、彼の中で抱き締め閉じ込めてくれたら止むのだろうか。そう、考えながら。

腕横で上がった彼の手の平が、私の肩を押さえることなく力無く落ちる。
それも、ずっと見ていた。
「……何か、俺が出来ることはない？」
「ないよ」
「俺と一緒には、もういたくない？」
「それはもう言ったじゃない」
「……そう、だね」
唇が泣きそうに歪むのを、見ていた。
「個展を、また、しようと思うんだ」
「そう、頑張って」
「……うん」

終わった会話が悲しくてどうしようもないようだった。
気分に任せて意味無く歩いてきた私たちは丁度、人通りの少ない場所へと出たようだ。来週開店予定の美容室前で立ち止まって、私たちは話している。
少し足を進めれば、温かい空気に包まれることもできるカフェだってあるのに。私たちは吹きっ晒しの歩道でただ立ち止って向き合っている。
絶望と失望に囲まれながら。

『彼は優しいでしょう？』
見上げる私の瞳に彼が映ると、どこからか幻聴が聞こえて来た。
不意打ちで何の心の準備も無くその声を聞いてしまった私は、今までの無表情を貫けないで思わず表情を歪めてしまう。
私と彼とでは身長が違い過ぎて、彼の肩幅にすっぽり私の体は包まれてしまう。彼を近距離で見上げる時、いつも首が痛いと実は会った時から思っていた。

『誰へも優しいのは、実は凄く残酷よね』
泣き出しそうな私を見て、彼が大人しく黙ってられる人間だったなら。
深く傷ついたのがまるで自分のように、顔を歪めて彼が私を包み込んだ。
悲しい顔、きっと彼は私の表情を映し出しているに違いない。写真みたく、それか鏡のように。

「……何があったの。何が君を苦しめてるの。やっぱり、手放すなんて……出来ないよ」

『私だけに優しくして欲しいって、そう思うのよね。でも、彼は誰にでも優しいの』
写真に切り取られた彼の優しさは、もうその枠に収まりきらない。
生きとし生けるもの全てに向ける彼の愛情を苦しく思う。
私を強く抱き締めて、その腕で壊してくれたなら。硝子細工を扱うように優しくしないで、むしろ私だけにその感情を向けてくれたなら。
それが憎しみでも、悲鳴でもいいから。

「……俺を、拒絶しないで」

私は私のしていることの正当性を見つけることが出来ずに、ただ途方に暮れている。
耳元で聞こえる彼の掠れ声。首と背中に回る優しい腕。触れるか触れないかの絶妙な位置を彼は保ち、私を冷たい冬の夜風から守っている。
誰かがこの場を通り過ぎてくれさえすれば、こんな馬鹿げた茶番劇を終わらせることができるのに、今は彼の一人舞台だった。
私は作りかけの彫像宜しく不自然な形で時間が止まったままだ。

優しさは恋愛をする上で必要事項。
自己主張はたまに束縛に繋がるから、それ程重要視しない。むしろ少し離し合う余地さえ持っていれば、長く続けていけると思う。
将来の展望の為には金銭感覚の一致も必要。
食べ物の味は譲歩と努力一つで何とかなる。

『誰にでも優しいっていうのは、実は何よりも大切なものはないってことだと思わない？』

私はそれの答えを知りたい。

恋愛査定　4

「ねぇ、彼は優しいでしょう？　誰にでも、優しいのよね」

唇を細かく開閉させながら、薄ら笑いを浮かべる彼女の顔を、私は黙って見ていた。

何を言いたいのか、その意味が私にはよく分かる。何故なら、私は女だからだ。

彼の傍に寄る女を全て牽制してしまいたい。私はずっとそんなことばかり思っていた。ここ最近、ずっとだった。

彼女は私と一緒だ。今、彼女は私を牽制している。

ただ私と違うのは、彼女は私よりももっと彼の近くにいるのだと自負していること。

私は彼女のずっと下に位置している。自信なんて勿論なかった。

老若男女問わず、彼の優しさは多岐に渡っている。向ける場所があればどこへでも向かってしまう彼の優しさを、正直『ただの写真好き』ではなくなった私が疎ましく思っている。

優しさや執着を向ける場所は一か所でいいのだと、思う私の方が間違っていると知っていながらも。

テーブルの上に置かれた珈琲は冷めて来ている。

珈琲にしては芳醇な香りが私の鼻を擽り、何度もそのカップに手を伸ばしそうになった。

でも、それは彼女が淹れた珈琲なのだ。

それでもそう思うと、躊躇した指はテーブルの線を越え、カップを手にする事はない。

なけなしの自尊心だった。

「何が、言いたいんですか」

「だから、聞いたそのままのことよ。まさか誰にでも向ける優しさ

を、自分だけなのだと勘違いすることも無いでしょう？」
「私は今、彼と交際しているのだと、思っていたんですが」
「そう、ね。今、はね」

近場の個展にしょっちゅう現れる若い女だという認識でしかなかった私が、彼の視界に入ることができたのは、意外にも彼女の手引きがあったからだった。
ベリーショートに大きなパールのピアスを付けている彼女。
化粧っ気の殆どない色白の肌に、アプリコットのグロスを引いている。漂白された白いシャツの中で、細い体が動く様は体の線が全く出ていないのに物凄く色っぽいと思った。
小さな喫茶店を一人で営む彼女。
彼女の営む喫茶店の壁に彼の写真を飾る様になってから、彼の写真は世に出たのだという。
私が彼女のことを聞くと彼はいつも「恩人なんだ」と微笑む。
その言葉の奥に含まれた色々な感情に、私が全く気付かないとでもいう風に。
テーブルの下で、私は拳を強く握り締めた。
交際を申し込まれたのはつい先日のことだ。
彼のことをただの写真家だと思えなくなった私が、そろそろ彼に猛アタックをしようかと画策していた頃だった。
個展へ通い詰めるようになって既に一年が過ぎ、彼女の手引きで日常会話もできるようになってきていた。
それでも彼とは、彼女を挟んで写真をポストカード化する話とか、どこの景色が綺麗なのだとか、そんな話だけだ。
彼と彼女の会話は、まるで空気の様で。私にはその空間を冒す事なんて出来なかった。
近くに寄れば分かる。彼と彼女がどれだけ親密で、どれだけ強く結び付いているのか。
今思えば、彼に次第に近づきつつある私を、敢えて彼に近付ける

ことで、牽制していたんだろう。
だから、彼が私に交際を申し込んだ時は本当に驚いた。そして、私は彼女に『勝った』のだと思った。本当に意地の悪い女なんだと、自分でも思う。
彼女の城である喫茶店は、今日に限って妙に空いていた。
誰にも珈琲を淹れなくてもいい彼女は私の前を陣取り、私は珈琲豆の貼り付いたテーブルの上に乗った白い指を見る。
ワインレッドのマニキュア。
シンプルな指輪が彼女の指に光っている。
大事にしているらしい指輪は、彼が彼女へ贈ったものだ。
写真家として成功した暁に、彼女はそれだけを彼にねだったのだと聞いていた。
経緯を聞いた私に、彼女は微笑みながら「これがあればうるさい常連客を黙らせられるでしょう？」と答え、彼はそんな彼女を眩しそうに見ながら「彼女はこう見てもモテるんだよ」と苦笑した。
彼を繋ぐ鎖。
彼の元へと続く鎖。見ない振りをするには大き過ぎて。

「彼の優しさが重荷に感じることはない？　私はそうだった」

人の行き過ぎる窓外を見て、彼女が溜息をつく。
そうだ。今、現在私はそう思っている。
私と付き合うことになった彼は、従順な飼い犬の如く私に奉仕してくれる。
それは決して誇張などではなくて、彼よりも歳下の私を包む様に愛してくれている。私の望むものを全て叶えてくれようとしてくれている。
多忙な彼はそう頻繁に私に会うことが許されない。奉仕はその申し訳なさの裏返しかもしれない。
でも、彼の優しさは私以外にも向いている。彼の優しさはもっと

広く、深いものだ。
私と会える時間が出来た時に、彼は彼女の喫茶店に足を運び珈琲を飲む。むしろこの喫茶店が待ち合わせ場所の時もあった。
微笑む彼を見て、私は何を思っているのだろう。
鳥籠に閉じ込めてしまいたい程の執着を感じているのだろうか。それとも殺してしまいたい程、憎く感じているのだろうか。
彼の全ては決して私の物になることはないのに、彼の結びつき全てを私が切ってしまう訳にはいかないというのに。
私は震える指で冷めた珈琲カップを持ち、一気に飲み干した。
カップの向こうで微笑みながらシュガーポットを押し出す彼女が見えるけれど、見ない振りをして全て飲み干した。
咽喉の奥に残る苦味と、舌の上に残る酸味。酸味の強い珈琲が苦手な私は、その違和感に顔を顰める。

「私だけに優しくして欲しいって、そう思うのよね。でも、彼は誰にでも優しいの」
「そう、ですね。でもそれは彼の良さだから」
「本当に、そう思う？」

試すような瞳に、私はびくついた。
震える指が、カップをソーサーに戻す時に細かい震動音を立てる。
ドアベルが鳴った。
飴色の扉に付いたブロンズのベルは、客がドアを開けると鳴り響く。

「いらっしゃい」

彼女が常連客に微笑んで私の前から離れると、私は固まっていた呼吸を浅く再開した。
遠くで「ブレンド」という声が聞こえる。濃紺のスーツの常連客

は、慣れた様子でカウンターに付くと新聞を広げた。流れてくるのは煙草の臭い。
灰皿を渡しながら、笑い合う彼女と客の声が遠くに聞こえる。
彼女の見慣れた白いシャツ姿。
捲り上げたシャツから出ている細い手首を見ながら、私は横に置いたバッグから財布を取り出した。

「いいわよ、今日はオゴリだから」

彼女が笑う。

「結構です。払いますから」
「強情っ張りねぇ」
「常識です」

五百円玉は、あいにく財布に見つからなかった。
千円札をテーブルに叩き付けると、カウンターに珈琲を出した彼女がカウンター向こうから出て来る。
そんな彼女の顔は見ない様にして、私は手にしたコートを羽織った。

「……御馳走様でした」
「ねぇ」
「まだ何か？」

不審げに立ち止った私の頭の中で、警告音が鳴り響いている。
もう私を放して欲しい。
もう私を責めないで。
こんなに辛い想いなんてしたくないのに。
恋愛を全くしたことがないと言えば嘘になる。辛い恋も、悲しい

恋も、あるのだとは知っている。
それでも私にはまだそれを噛み砕き自分の糧にする程、実績も経験も無くて、ただ答えのない中を蠢いている。
近づいてくる彼女のピアス。
アプリコットの唇。
もし彼が彼女との過去を私に打ち明けたのだとしたら、それこそその場で私は衝動的に別れを告げてしまうだろう。
耳打ちしてくる掠れた女声。女の私ですら、それを心地いいと思ってしまう。

「誰にでも優しいっていうのは、実は何よりも大切なものはないってことだと思わない？」

そして、私は彼女へ一言も応えずに、チェッカーガラスの扉を開けて喫茶店から飛び出したのだ。

◆　◆　◆

私を見上げる彼の顔。
愛おしそうに私の頬を撫でて、甘えるように唇を掠めるのは彼の吐息。
肩幅の広い彼の胸に頬を埋めると、触れるか触れないかの繊細さで包み込んでくる腕。
嬉しそうに、幸せそうに、私に触れる指。
彼を形成した全てのことを、私が憎んだり羨んだりするのはお門違いなのだと思う。
決して垣間見ることのできない、彼の過去とこれまでの経緯。
そこに彼女がいるのなら、私は未来を紡いでいく為に受け止めて行かなくてはいけないことだ。
彼の愛情には、裏表がない。

彼の気持には、偽りがない。
くだらない嫉妬や、羨望なんて捨ててしまえばいい。
そうだよね。そうなのでしょう？　そうしかないのだ。

言えばいいじゃない、と私が言う。
心の奥底で抑圧された私が、表向きは何でもない顔を装っているどうにもならない私をせせら笑っている。
彼を失いたくはないのなら、彼女の存在が邪魔なのだとはっきり言ってしまえばいいのだと、私が言っている。
彼女の存在が不安なのだと、いつか彼が連れて行かれそうで怖いのだと言えばいい。
いくら愛情の満ち溢れた言葉を聞いても、心の奥では彼を疑っているのだとそう言ってしまえばいい。
会いたいのだと言えば、迷惑になるかもしれないといつも不安に思ってると。
彼女には指輪を贈ったのに、私には指輪をくれないことが嫌なのだと思ってると。
彼女に会わないで。笑い掛けないで。
私の知らない会話をしないで。
私の知らない時の思い出話をしないで。
彼女と離れて、私を選んで欲しい。

彼が言う。
私が全く気にしていないとでもいう風に。
「彼女は俺の恩人なんだ。仲良くしてくれると嬉しいよ」
私は強張った表情を浮かべて、微笑む。

彼女が言う。
私の傷に刃物を刺し込んで、抉り取る非情さで。
「誰へも優しいのは、実は凄く残酷よね」

私は否定できずに、呼吸を止める。

私が彼に別れを告げたのは、それから半年後のことだ。

恋愛査定　5

指を絡ませれば、彼の指先がそれに応えてくれる。
膝の上に乗り上げたまま逃げるように俯けば、優しい手の平が私の頬を挟んで柔らかく上を向かせてしまう。
こんな時くらい、乱暴にしてもいいのに。
そう心の奥で思いながらも、そんな時ですら優しい彼のことを心から愛おしいと思った。
荒くなった吐息交じりで私の名前を呼ぶのは、やっぱり卑怯だと思う。
そんな彼は、私には抗いがたいほど色っぽいから。
内緒話にも似た囁き声。今にも泣いてしまいそうな彼の声が聞こえてくる。
「……駄目だよ。もう、止められないよ」
耳の中が声に浸食されて、私は嫌がる素振りを見せながら彼の手の平の中で小さく首を振って見せた。

一度、気にすると全く見ていなかったものが見えてくる。
絡む指先。
ぶつかる視線。
触れあう吐息も全て、私の妄想の虜となって行く。
この指は彼女に触れたのだろうか。彼女の微笑みが、私をぎりぎりと締め付けていく。
過去なのだと割り切ってしまえば楽なのに、それでも離れようとはしない彼と彼女の結びつきに、私は勝手に邪推してしまう。決して、彼を疑いたいわけではないというのに。
この唇は彼女に触れたのだろうか。彼女のアプリコットの唇が私に迫って来るような感覚。
彼の唇を貪欲に受け入れながらも、純粋に愛おしいと思えない。

舌を絡ませて吐息を落としながら、私は色素が薄い所為で柔らかなそうな色合いの彼の髪の毛を想う。
彼の頭に指を入れて、そのまま乱暴に掴み上げてしまいたい。
彼の頑丈な肩に歯を刺し込んで、歯形を付けて噛み切ってしまいたい。
彼の全てに私を刻み込んでしまいたい。
私という大きな傷が決して消えない様に、激しく深く傷付けてしまいたい。
暴力的な衝動がやってくる。

背中には、私に遠慮して抱き締めてこない腕。
頬から離れた彼の指は引き寄せられるように私の指に絡み、それ以外に今繋がっているのは唇だけだったから突然、泣きそうになる。
彼が提示したたった一ヶ月。
残されたその期間も少しずつ目減りしていっている。
それでも、馬鹿げた上に無駄な足掻きともいえるその短い時間に、誰よりも安心しているのは私の方かもしれなかった。
別れたいのだと言いながら、私はいつでも彼の行動を探ってしまう。
私の変化に気付いて、彼が何かしてくれるのでは、とそんな馬鹿げた夢をずっと見てしまう。
この胸の傷に気付いて欲しい、鮮血の噴き出る真新しい傷に。
無意識に向けていた唯一の明るさが残る窓外。
「……こっち、見て」
彼の吐息が私を呼んで、視線を戻させる。
無言のまま、意味無く彼を見詰めると、彼は奥歯をぎりと噛み締めた。
何がそんなに悲しいの？　彼の悲痛な表情を見て、そんな馬鹿なことを思ってしまう。
傷付けているのは私の方だというのに。

傷ついているのは私たち二人だけれど。
指の脇を優しく探られると、背筋に沿って撫でられた気分になった。どうしても今、体を重ねなくてはいけない様な気持にされてしまう。

抱きたい。抱かれたい。
あの人のことなんて、もう忘れてしまいたい。
熱くなっていく頬、彼の吐息の熱さと同化して、このまま溶けて消えてしまいたい。
何もかも忘れて互いに溺れてしまうには私は少し大人になり過ぎて、彼を形成した全ての物をはぎ取ることを躊躇してしまう。
彼の成長する礎となった彼女の存在は認めているというのに、女として彼の傍には立って貰いたくはない。それはただの複雑な女心だ。
だって、私はどうしても意固地な自分を捨て切れない。
彼をいつか連れ去ってしまいそうな彼女の存在を認めることが出来ない。
彼が「恩人なんだ」という度に、張り裂けそうな嫉妬心。彼女の指を切り取って、指輪ごと海に投げ捨ててしまいたくなる。
その気持ちを彼が分かる筈も無い。

優しさだけを私に与えて、安心している彼のことが愛しさと同じ程に憎くなった。
苦しい。好きで苦しいのに、同時にここまで私をおかしくしてしまった彼が許せなくなった。
彼のように何もかもを忘れて、苦しくて辛いのだと、好きだから離れて欲しくないのだと、縋り付くことが出来たら。
でも、何処かで冷静さを捨て切れない私は、胸の内を曝け出してしまうのを躊躇してしまう。
出会って決して長いとはいえない私ではなく、何もかもを分かり

合っている長い付き合いの彼女を彼が選んだのだとしたら？
彼女はそれを分かっているからこそ、あんな意味ありげな言葉を吐いているのだとしたら？
指輪は、その証かもしれない。
もう狂ってしまいそうだ。お願い、私を解放して。
お願い、私を壊して。

無言で私の腕を引いて彼が飛び込んだ場所。何をする目的の場所なのか知っている筈なのに、私はどうして拒絶しなかったんだろうか。
彼が私を求めている事なんて、誰よりも知っているのに。一度触れてしまえば、それこそもう箍が外れるように我慢など出来ないことを知ってるのに。
遠慮がちに唇で私の首に触れて来る彼を、仰け反りながらもっと深く促す私は、触れて欲しいのか、その場から逃げ出してしまいたいのか。もう分からなくなっている。
カーテンすら閉めていない部屋で、真っ暗なまま私たちは部分的に繋がっていた。
私よりももっと泣きそうで情けない表情をして、今回が私に触れる最後の機会なのだと言わんばかりに貪欲に唇を探していた彼が、私の名前を呼んでくれる。
聞こえない。
囁く声はもう泣き声で、私には何も聞こえない。
聞きたくない。

カメラを持つ時にどうしてもぶつかってしまう彼の指の腹は、皮が少し厚くなっていた。
そこをなぞりながら指を絡ませると、彼の膝に腰掛けていた私との距離が遠いとばかりに、彼が少し首を伸ばしてくる。
点滅しているのは、向かいのビルにある電光の看板。カーテンが

開いたままだから、灯りが部屋に入って来ていた。
眩いブルーに彩られて、彼がゆっくりと深く私を受け入れる。
ぼんやりと開いた視線が彼と合って、彼が私の顔を見詰めたままキスをしていたことを知る。
重なった視線。
歪んだ唇。
「……抱きたいよ。抱かせて？」
唇を少しずらし、唇から一センチも離れずに彼は言う。
眉を寄せた私の顔をそれ以上の苦しみを抑え込んだ表情で彼は受け止めて、再び唇を重ねるとゆっくり背中に腕が回ってくる。
いいなんて、一言も口にしてないのに。
私の体が傾いでいく。
だからね、あのね。
言葉は私の唇から洩れて来ない。
いつもよりほんの少し強引に彼が私の歯列を舌で押し開くから、私は何一つ言えない。
その部屋には窓辺に一人掛けのソファーとオッドマンがあった。
何色なのかもわからないその影を見て、私は瞼を閉じる。
右目の奥から流れる涙を拭わずに、涙は頬を伝って私の肩へと落ちた。

初めてデートをしたのは、忙しい彼の仕事の合間を縫ったただのショッピングだった。
ぎこちなく待ち合わせの場所で片手を上げる私の前に、彼は全力疾走で駆け付けた。
真っ赤な顔をした彼が息も絶え絶えに謝ると、私は思わず噴き出してしまう。
待ち合わせの場所で一時間近く待った私は正直、本当に実を言うとかなり立腹していた筈なのに。彼の余りの様相を見ると、怒る気

すら失せてしまった。
それは彼の様相というか、彼の惨状。
乱れた上着を無理に戻したらしく、中に着ていたシャツは右に大きく崩れていた。髪の毛は額に張り付いた上にまるで鳥の巣の様で、額どころか首筋まで汗が垂れている。
下手に言い訳されるより雄弁だと思った。これを作為的にやるのならばかなりのつわものだ。
腹を抱えてただ笑う私の前で、情けない表情を浮かべる大型犬。
交際してから二人きりで会うのは初めてだった筈なのに、やっぱり彼は最初から大型犬にしか見えなかった。
「良、かった……！　怒って、ない、んですね……」
安堵してしゃがみ込んだ彼に、遅刻の連絡をしなかった事で私の怒りが炸裂したのはその後の話。
その時から力関係は決まっていた。

二度目のデートは雨が降っていた。
店から出ると小雨がパラついていて、珍しく気の利いたことがあったものだ。彼は偶然、折り畳みの傘を持っていた。
彼は嬉しそうにバッグから取り出し、階段の上に立つ私に傾けて見せる。
舞踏会でダンスを誘う王子様宜しく、彼は微笑んだ。彼は小雨に濡れているというのに。
「濡れたら、風邪をひくでしょう？」
「別に、走ればいいと思うんだけど」
可愛げのないことを言う私。
でも、彼は何も言い返さず、私に傘を傾けたまま慎重に後ろ足で階段を下りていく。
危ない、と思った時には遅かった。
彼は傘を持ったままで階段を踏み外して、持っていた傘もその反動で階段の一番下へと転がっていく。

残されたのは小雨に濡れた私と、呆然とした表情で階段の手摺にしがみ付いてずぶ濡れになっている彼。
その時もまた、私は笑っていた。
決して恰好良くはないけれど、彼はいつも私のことを守ってくれた。それが、嬉しかった。
情けない記憶。愛おしい記憶。

初めてキスをしたのは彼の部屋。
テレビを見たままソファーで三時間、私が意味のない時間に飽きてきた頃。
後から聞いた話では、彼はその三時間ずっとどうするべきか悩んでいたらしいけれど、彼独特のペースに慣れつつあった私は、これもまた彼が必要なテレビ番組なのだと思い込んでいて全く気にしていなかった。
私が欠伸をする度、彼が何か言いたげにこちらを見ているのには気付いていたけれど、いちいち反応するのも面倒なので放っておいたのは今でも内緒だ。
個展や地方に行くことの多かった彼が次のデートに行けなくなったのだと、それを打ち明けられないに違いない。私はそう勝手に思い込んでいた。
だって、私たちの小さな喧嘩の原因はいつもそれだったから。
彼の部屋のソファーは革張りのローソファー。
デニム姿の私が、両腕を天井に向け眠気覚ましに大きく伸びをすると背中が背凭れを滑っていく。
その前日は仕事が多忙気味で私は酷く疲れていたから、そのまま眠ってしまいそうだった。寄りによって付き合い始めの男の部屋で。
その時、彼が私にキスをしなかったら私はもしかしてこのまま彼を男として見ることは出来なくなったかもしれない。
それ程に、彼の傍は心地よくそれでいて満たされていた。
そんな私に被さった彼の顔。

優しく触れた後に、彼はもう一度軽く私の唇を掠める。
見上げた彼は私を好きで仕方がない、そんな表情をしていた。
「俺は男だよ。意識してくれないと」
照れたように微笑む彼の顔を見上げて、私は今更この愛玩動物だとも思っていた彼が男だったということを思い知る。
途端に彼の傍が気恥ずかしくなったのもいい思い出。
柔らかいその髪に指を滑らせて私がもう一度とキスを強請るまで、彼は寝転んだ私の上から決して離れようとはしなかった。
ずっと触れたかったのだと、彼は言った。
私はそんなこと、知らなかったの。

携帯電話が鳴っている。
「出て」
上に乗り上がっている彼を促すと、あっさり「放っておくよ」と言われた。
開いた胸元を片手で押さえて私が体を起しかけると、彼はそんな私の肩を手の平で押さえ留める。
真っ暗な部屋に洩れ入る電光看板のブルー。
微かに点滅するのは彼の携帯電話のグリーン。
今、私が言わなくてはいけない言葉は何だろうか。
彼には私だけに溺れて欲しいと願っているけれど、自分の仕事を軽視するようにはなって欲しくはない。彼の存在意義、彼の才能。それは色々な人が認めているのだから。
「駄目よ。出て」
強い口調で促すと、彼は悲痛な表情を浮かべてのろのろと私の上から体を起こした。
今まで圧し掛かられて重かった私の体に、決して流れる筈のない風が急に吹き付けた気がして凄く寒くなる。
未だ鳴り響く携帯電話に出る為に背中を向けた彼を、私は上半身

を起こして見詰めた。
通話ボタンを押したのか、彼が話し始める。
聞きたくないのにこの耳は、誰から電話が来ているのか探ってしまう。聞こえない振りをしてしまえば、いっそ楽なのに。
彼女からの電話でしょう？
もしそうじゃないとしても、私は勝手に確信している。
そうに決まっている。絶対に彼女だ。思い込む様は本当に病気の様だ。
最初は愚鈍な話し方だった彼の声に、少し気慣れさが含まれると私の予感は現実になってしまった。
私の名前を呼んだ声で、彼女の名前を呼ばないで。
それからどんなに強く耳を押さえても、時既に遅く、彼のワントーン上がった声が聞こえてきてしまう。
心が悲鳴を上げている。
「……ごめん、今はちょっと」
そんな彼の曖昧な台詞に、電話向こうは何か言っているのか。
耳を押さえる。私の耳を引き千切って仕舞いたい。都合のいいことも悪いことも何も聞こえない様に。
叫んでしまいたくなる。耳を押さえるだけじゃ、もう遮ることが出来なくて。
乱れたシーツの上で私の太腿が剥き出しになっていて、ここまでスカートが捲り上げられているのに初めて気づいた。
体の奥底にはまだ、こんなに煽られた熱が残っているのに。まだ。
「だから、後から掛け直すよ」
止めて。もう止めて。聞きたくない。
誰か、この声を消して。
着たままのコート、投げ出したバッグ。
履いたままの靴、それなのに開いた胸元。
背中を向けた彼の後ろを静かに通り過ぎて、ドアを開ける瞬間。

開いた重いドアの音に振り返った彼の表情を、私は決して忘れない。
本気で逃げる人間を掴まえることができる人なんて、いないことを思い知ればいい。
好きよ、でも大嫌い。

茨の手錠

「ねぇ、私のことが好きでしょう？」そんなことを言った私の顔を見て、彼は基礎化粧品も何も付けていない私の頬に指を伸ばした。
伸びただらしない爪で私を引っ掻いてくる。
「死ぬほどって程じゃないけど、好きだよ」
「十分よ」
疑いも無い本心で答えて、笑って見せる。
私は下着一枚しか付けていない下半身を仰け反らせて、その剥き出しの足にジーンズを纏わせるとファスナーを閉じないままで足を組んだ。
柔軟な思考でいけば、私たちの関係はとても上手くいっている。
性的な感情を持つ時のタイミングはいつも一緒だし、私だってそれにはどこでも応える自信を持っている。勿論、それは屋外でも台所でも突然に起こりうる事態だ。
短い髪で丸見えになった項に彼は唇を這わせると、まだ何も付けていない上半身に指を伸ばしていった。
診察なのかという程に執拗な愛撫は官能的には程遠い。肌の奥に沈みこむ沢山の宝石を探り当てようかという様な、厭らしい感覚がする。
その奥には腐りかけた汚らしい感情しか隠れていないのに。せせら笑いながらも、固く尖った先端に当たった指に甘く吐息を漏らした。
「もう開店に間に合わなくなるから、悪戯は止めてくれる？」
「別に腹痛で開店時間が遅れたとでも言えばいいじゃん」
「トイレに籠ってたって？」
呆れた。思い付きの言い訳にしても下世話でセンスがなさ過ぎる。
私は彼の手のひら一杯に包み込まれている私の乳房を自分の指でガードして、肩越しに沈みこむ彼の耳朶に噛み付いた。

唇の合間から、小さな悲鳴。
「噛み千切ってあげましょうか？　調教の行き届かない飼い犬には罰も必要よね」
腰に当たる部分で、彼の気分だけが盛り上がってしまったことが分かった。
きちんと『調教』しなくてはこのまま履いたばかりのジーンズを引きずり下ろされて後ろから無理やり、なんてことも珍しいことじゃない。
いつもなら少しくらい彼の部分を鎮圧させるのに協力する所だけれど、今日の開店を遅らせる訳にはどうしてもいかなかった。大事な十年来の友人が開店時間と同時に店を訪れる予定だった。
噛まれた耳を構いもせず、彼は眼を細めると「おっかねぇ」と鼻で笑う。同時に「調教の下手な飼い主にだって指導が必要だと思うけど」なんて毒づいた。
緩んだ腕から逃げ出すと、私は床に放り投げられていた下着を付ける。白いシャツを羽織ると冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。
咽喉を通り抜けていく甘味も酸味も苦味もない素っ気ない液体。それなのに、これがなくては私は生きてさえ行けない。
それは私の友人にも共通している。
決して友人との交際で恋愛の甘味も酸味も苦味も感じることはないけれど、手離す事だけは出来ない。まるでミネラルウォーターの様な存在。
「鍵はいつものように入れといてね」
背を向けた私に、彼が「帰ってくるまで待っててやろうか？」とニタリと嫌みな笑みを浮かべて聞いてきた。
シーツに下半身が隠れているけれど、彼は全裸だ。剥き出しになった足がベッドの下に落ちている。
太い指はついさっきまで私の中に埋もれ、私をかき混ぜていた。その彼の指は今、煙草を掴んでいる。

似合わない朝の光がカーテンの隙間から洩れて、彼の背中を照らしていた。広い背中、無精ひげ。
真っ暗闇の部屋に一人帰ってくる自分と、彼がベッドの中で待っている姿を想像して辟易してしまう。それを私は決して望んでいない筈だ。
彼に私が望んでいるのは、体の充足感だけ。
私は空になったペッドボトルをゴミ箱へ捨てて、聞こえない振りをすると愛用のショルダーの持ち手を掴んだ。
「昼までには出て行って」
「あいよ」
蛍光色のラインが入ったランニングシューズに足を突っ込み、私は勢いよく寒さの残る朝の中へと駆け出した。

◆　◆　◆

「で？　協力して欲しいって？」
珈琲を落としながら振り返ると、もう長い付き合いになる友人がカウンターにいきなり突っ伏した。
柔らかな栗色の髪がカウンターの上に散らばり、その余りの量に私は小さく溜息をついている。身だしなみも恋愛の一歩じゃない？
そう言いたいのを私はずっと耐えていた。
彼の望んでいる言葉など何一つ吐かない様に、慎重に言葉を選ばなくてはいけない。彼は今日、恋愛相談に来たのだ。しかも、この私に。
少しくらい意地悪をしても罰は当たらない筈だ。
「協力、って言うんじゃないよ。俺だって……自分で頑張りたいとは……思って、る？」
「そこで疑問形にしないで欲しいわねぇ」
「分からないんだよ。もう、そんな感情を持たないで結構経ってるからかな……」

作家もののカップに唇を付けて、友人はカフェにしては小さめの窓から外を覗き込んだ。
カウンターの真横に付いた嵌め込みの窓は中からは普通の窓なのだけれど、日中外から見ると鏡に見える。たまにそこで身だしなみを整える通行人がいるのが面白い。中からは丸見えなのに、全く気付いていないのが。
煉瓦造りの壁には大きな写真が飾ってあった。
友人の写した出世作とも言える写真だ。
初めて彼の写真を見た時、私は芸術的は全く覚えのない人間だったのにもかかわらず、彼の才能は大切にしようと心に誓える程、その衝撃は凄かった。
枯れ木、落ち葉。一瞬の散らばった風の悪戯が、そこには閉じ込められている。
この写真が欲しいのだと私が言うと、当時大学生だった友人は恥ずかしそうに「これは偶然だったんだよ」と答えた。何もする気が起きずに、落ち葉に寝転びながら撮った一枚なのだとも言った。
私は彼の先輩だった。大学で何かと騒がれていた彼の存在は知っていたけれど、学祭の写真展で会うまではただのマイペースな人間だとしか知ってはいなかった。
当時、彼は常に騒動の真ん中にいた。
本人の意思に関係なく、それはいつも突発的に起こる。
誰へも分け隔てなく優しく、男女間の接触をあまり重要視していないらしい彼はすぐに好意を持たれやすい。
天然の八歩美人と当時の私は呼んでいたけれど、とにかくその小悪魔的な行動に惑わされた女が多かった。
本人は全くその気がないというのが、難点だ。後腐れない様に程々付き合っておけばいいのに、告白された彼の行動は女の自尊心を木っ端みじんにしてしまう。
告白されると、彼は絶句し、耳まで赤面させると俯いてしまう。勇気を出して告白した人間の半数以上は、少なからず好意を持って

くれているのだと勘違いしてしまっているのだろう。
彼の「そんなつもりじゃ」なんて言葉に、激昂することもあった。
その柔らかで人好きされやすい容姿。見かけの割に男らしい体つき。たまに気まぐれな猫の様に、眼の前から消えてしまう分からない部分もミステリアスに見えるのだろうか。
ただ単に友人は行き過ぎたマイペースなだけだ。見かけはどうにもならないのだけれど、彼の親切心は同居していた彼の祖母から教えられたのだと聞いた。
女性には優しくしなさい。友人はその教えをずっと守ってきたらしい。律儀にも。
分からないのだと、友人は言う。
親切と愛情の狭間が難しく、それの線引きが出来ないのだと友人はいつも言っていた。
彼の過剰な親切と、騒動の発端となるボディタッチにいつも行き過ぎた感情を持つことなく、冷静に意見を言える私にいつしか相談を持ちかけるようになって十年。
彼は大切な親友として、私の傍で腰掛けている。

大学時代と何ら変わらない、情けない表情と煮え切らない態度。
問題続発だった恋愛騒動を避けてきた友人は、三十路に差し掛かろうとした今頃になって純粋な恋愛感情に悶えている。
「誘えばいいじゃない」
「一言、二言しか話したことがないのに？　写真展には来てくれてるみたいだけど、最初以降は俺、話掛けられてもいないんだよ？」
「じゃあ、写真は好きだけどその写した人間には興味ないってことじゃないの？」
私の辛辣な台詞に、顔を上げた友人が再度カウンターに突っ伏した。
それだけ思いっきり額を打ったら、跡が残るだろうに。そう思いながら、空になったカップに熱い珈琲を注ぐ。

今日も店は暇だった。
不思議なものでただの珈琲を飲みに来る店でも、客の周期というものはある。
二日に一度の客。一週間に一度の客。それが偶然にも途絶える日が今日だったらしい。
濃密な友人との時間を楽しみにしていた私にとって、それは凄く都合のいいことだ。言葉遊びとも言える友人との会話は、大人の恋愛にも似ている。互いに心の内を見せずに、どこまで近寄れるか。
それを楽しみにしていた筈なのに、友人は店の扉を開くなり恋愛相談をしてきた。
「諦めたら？」
「……やだ。今回だけは、無理なんだ」
顔を伏せたまま、籠った声でもはっきりと私に拒絶して見せる。
正直、長く付き合っているけれどこんな友人を見たことはなかったから、胸が騒ぐ。

大したことないじゃない。
友人の絶賛する彼女を見た時の第一印象はそれだ。
野暮ったい服装、気の強い口調。長い髪を後ろに流し、友人の声に相槌だけを打って立っている。
たまに写真のことを何も知らない癖に、まるで知った様な口を聞いている。
安っぽい子供みたいな感想。綺麗だとか、胸を打つとか、簡単な言葉ではなく、如何にも考えて言ったという風な稚拙で詩的な感想だ。
私はシャツの袖を二回捲り、剥き出しになった自分の手首を見詰めた。
自分が言うのもなんだけれど、細く女らしい指には指輪がはまっている。友人からのプレゼントだ。これの奥底に秘められた理由を友人が知ることは決してないだろう。

自分の写真の展示会な筈なのに、初日の短時間しか現れない写真家がここ最近はしょっちゅう姿を見せている。そんな噂話が関係者の間に流れているらしい。
そろそろ海外へ拠点を移すのでは、なんて可笑しな推測も出始めている。
何のことはない。写真家は恋に落ちただけだ。
それも久し振りに全身全霊を掛けた恋に落ちてしまった。
恋に『落ちる』とはよく言ったものだ。
あれだけ恋愛に拒否反応を示していた友人が、一度だけしかも少し会話を交わしただけの女にこれだけ執着するなんて、落とし穴にでも落ちたみたいだ。
恋は盲目、恋は闇。一度、堕ちてしまうと何も見えなくなるらしい。どんなに大したことのない女でも、次にいつ会えるか分からない女であればある程、切なさは倍増してしまう。
どんなに私がブレーキを掛けようとも、元々マイペースで鈍感な友人は気付かないし、止まらない。
尻尾があれば振ってるだろうな。そう思う程に、彼は好意を前面に押し出している。
背を向けれて長い髪が揺れる度に、奥歯を噛みながらでも微笑みは絶やさず彼女の後ろに付いて行く。
「これまで話掛けるきっかけがなかったんだ」
照れながら、言った友人の顔を不思議そうに見上げ「お忙しいのかと思って、あまり近くに寄らない様にしてました」と彼女は言った。
「私は。写真を見に来てるだけだから」
頑なな口調で言った彼女の前で、少なからず友人が表情を変えずとも傷ついている。
今にも「忙しそうでごめんなさい」と言ってしまいそうな友人の横で、私は言葉を選ばない彼女の無遠慮さに苛立っていた。
こんな女のどこがいいの、そう詰ってやりたい気持ちになりなが

ら大人の余裕で微笑んで見せる。
猫でも狸でも被れるものは被らなくてはいけない。
たった一人の客にこれほどまで懇切丁寧に説明しているなんて、どれだけ暇人な写真家なのだと思われているのだろう。人ごとながら心配になってきた。
その重要性を彼女は全く理解していない。
背中から友人の名前を呼ぶと、僅かに泣きそうな表情を浮かべて振り返った。
恋愛感情を持っていない人間には過剰な親切を愛情と勘違いされているのに、愛情表現なんだと気付いて欲しい人間には全くその気になって貰えないなんて、全く使えない。
「打ち合わせに行けば？　そろそろ時間でしょ？」
私の促す声で跳ねあがる様にして壁時計を見た彼は、もう既に数メートル離れた場所に行ってしまった彼女の背中へ声を掛けられずにいた。
振り向きもしない。彼女の頑なさは、愛情の裏返しと見るべきか。それとも無関心と見るべきか。
私にも判断できないものが、友人に出来る筈も無い。
「私は気になさらず。勝手に見たら勝手に帰りますから」
「……はい。お気を付けて」
本当に意味が分からない反応を彼女へ返してしまってから、私に向けて来る縋る様な友人の視線を、ため息交じりで受け止めながら「早く行け」と片手を振った。
情けない男なのだと私も割り切ってしまえばいいのに、何故か完全に手放すことが出来ない自分の世話好きに吐き気がする。
「彼を見て、どう思う？」
聞いた私を彼女は不思議そうに見つめる。
人の眼をマジマジと見つめるのは彼女の癖なんだろうか？　底の見えない空洞の中を見ている様な不安定な気持ちになって、私は眉

を顰めた。
何もかもを見透されそうで気分が悪い。
体の半分を包み込むコートは、小さな彼女が羽織るとまるでてる坊主みたいだ。長い髪を高く結い上げればバランスも取れていいのに、なんて馬鹿らしいことを考える。
休みだった私の店は格好の場所になっていた。
軽く誘った私の声に最初は躊躇した彼女もおずおずと頷き、コートを脱いでカウンターに腰掛けている。
背の低い彼女ではカウンターは少し高いようだった。両手の平で珈琲カップを包み込むと、砂糖も入れずに一口飲み込む。
私はそんな彼女の行動をずっと見ている。
吐き気がする程、彼女は女だ。そう思いながら。
「……どう思う、とは？　こんな写真を撮れるなんて凄い人なんだとは思いますが」
慎重に言葉を選んで彼女は答えて来た。
当たり前の反応だ。これで「かっこいい」とか「好き」なんてあからさまな反応を望んでいる訳ではないし。
これが『彼の選んだ彼女』なのだと思うと、恋愛感情を仕舞い込んだ筈なのに込み上げる汚らしい感情が抑えきれなくなった。
こんなどこにでもいる様な、ありふれた、何の価値も無く、糧にもなりえない女を選ぶなんて。本当にどうにかしている。
そんな殺気混じりの感情を気付かせない様に、私は彼女に背を向ける。
洗ってあった珈琲カップを持って棚に仕舞い、スプーンを引き出しに入れた。
今まで出会って来た女とは違う。彼女は私を『彼』から引き剥がすに違いない。私が守ってきたその位置を、呆気なく奪ってしまうに違いない。
傷付けるのも苦しめるのも、喜ばせるのも幸せにさせるのも、全て奪ってしまう。

私がこの場所を守る為にはどうしたらいい？
ふと視線が落ちた私の指には、大切な指輪がはまっている。
私を絡め取る茨の手錠。

鍵はまだない。

気狂いピエロ

表情が凍り付いて行くのが分かった。
微笑みなんて、心の中に関係なく意外にも出来るものだ。慣れた筋肉の収縮、少しくらい唇が歪んでいようと気付く人間なんていやしない。
指先が冷たいと思う。
呼吸をしているのか、それとも止めてしまっているのか。全く分からない。
決められた時間に、決められたことをする。今、自分から失われているのは創造性だ。何か新しく引きつけるものを写せと自分にどれほど言い聞かせても、できる気がしなかった。
誰かに優しさや慈愛を振り撒くことができるのは、それが満たされている人だけだ。そんな誰かの言葉をふと思い出す。
彼女に出会うまでの自分は、枯れ果てていたのだと思ってたのに実は満たされていたのだ。そう気付いて、大きくなりすぎてしまった自分の贅沢さを満たすに許容量に辟易した。
満たされない。
満足できない。
渇き過ぎた咽喉が潤いを求めている。
手にした過去の遺物とも言える写真の数々。向かいあっているクライアントは本気で笑っているのか、作り笑いを浮かべているのか。
全く気にもしていなかったことが気に掛かって、仕事の打ち合わせに入り込めない。
誰も、何も自分には求めていないんだ。だから、自分は自分のままでいたらいい。そう思い込めたのは過去のこと。
落ち着かない閉鎖的な空間で、落ち着こうと深呼吸を繰り返し、どんどん速くなっていく鼓動につい動揺してしまう。
落ち付け。そう言い聞かせても、目の前の何もかもが黒い視界に

覆われて、確か掴んでいた筈の珈琲カップの取っ手の在処が分からない。
耳をつんざく破壊音。かん高い耳障りな音が響く。
四方八方に飛び散る破片と、足に感じる灼熱感。肩と頭を強く打った事だけは何と無く分かった。
誰かの叫び声が失いかけた意識の中で辛うじて感覚を失っていない耳を打って、ただ寝かせてくれとだけ思う。
寝てないんだ、ずっと。眠れない、君を失ってから。
何も手に持ってない。苦しい。
会いたい。

目を覚ますと、自分の部屋だった。
汚れた部屋には足の踏みどころも無い程に写真が広がっている。
誰が自分をこの部屋へ送り届けたのか。上向きになったまま天井に片手を上げて、その大きな手の平を眺める。
少し成長し過ぎた。この身体をエレベーターがあるとはいえ送り届けて、ベッドまで上げるのは至難の技だっただろう。
意識を失った時に小指の先を切ったのか、可愛らしい絆創膏が巻き付いていた。近くにいた女性担当者の心遣いだろうか。それにしても大の男の指には物凄い違和感だ。。
ピンクのギンガムチェックにレース模様。真ん中に血が滲んでいる姿は結構シュールだ。
無意識に手を伸ばしたベッドのサイドテーブルには、携帯を重しにしてメモ帳が一枚残されていた。
仲良くしている会社の担当者――彼は男性だ。汚い文字で堕落した生活を叱責する文言。ここまで連れて上げるのにどれだけ苦労したのか、その件については後日食事の席で話すと書かれていた。
きっと彼には高い酒と新鮮な刺身を用意しなくてはいけないだろう。ついでに長々と続く仕事上の愚痴と、今回の事に関する苦情も

聞く時間も用意しなくてはいけない。
開いた携帯には着信もメールも残されてはいなかった。
ついいつもの癖ですぐに着信履歴を見てしまう。
残された履歴。もう二ページ以上も遡らなくては彼女の番号を探せない。震える指が、どうしても番号を押してしまう。
出て欲しい。声だけを聞きたい。
でも声を聞けば彼女には会いたくなるだろうし、会ってしまえば彼女には触れたくなってしまう。
触れたら、離す事が出来ない。
それを知っているのか、彼女は電話にも出ようとはしなかった。
反応を示さない携帯を枕脇に転がして、腕で瞼を覆う。
大きく溜息をついた筈が、思わず蛙の潰れた様な奇妙な声になった。
「……情けないな。俺」
仕事も何も手に付かない。そんなことにだけはしたくなかった。
彼女の好きな写真。自分の生きがいである趣味と仕事の両立。大人になっているのだからプライベートとビジネスの区切りは出来る筈だ。そう思っていた。
それがどうだ。リビングに足の踏み場は無く、ソファーにも仕事の資料が広がっている。
完全に失われてしまったプライベートの時間に食い込んだビジネスは、自分の睡眠も何もかもを奪い浸食して結局このざまだ。
「この部屋見て、驚いただろうなぁ」
ゴミ屋敷とはこのことか。まだ食べ物が放置されなかっただけましか。
この数日間、食事という食事を摂取した覚えがなかった。クライアントと食べた二日前の昼食を最後に、自分の記憶は途切れている。水と珈琲、それくらいは飲んだ筈だけど。
ジャケットだけを脱いで、それ以外はそのままの状態でベッドに投げ込まれたらしい。気を使ってくれたのか、シャツの首元は二つ、

ボタンを外してくれたおかげで苦しくは無かった。
時間を見るとそれでも四時間程、眠っていたようだった。
薄い膜が張っていた脳味噌は、大分クリアになって暢気な腹は盛大に餌を求めて鳴り響いている。
「……腹、減った」
重い体を起こし、ベッドから這い出ると冷蔵庫を開けた。
勿論、食べれそうなものは何もない。入れた覚えすらないのだから仕方ない。料理をする、という経験が自分には無い。出来合いの物を買ってきたり、外食でいつもは済ませていた。
後は彼女が作ってくれていた。
思い出す度に、体中が彼女を求めて軋んでいる。小さな体に大きな瞳。少し気の強い言い方をしているのに、実は甘え下手でこちらから手を伸ばさないと彼女は決して近付いてこない。
昔、写真に撮ったことのある小動物の様だ。遠くで自分の姿を黙って見つめ、危害を与える存在ではないか確かめてからゆっくり近づいてくる。
傍にいるのに、こっちが腕や指でも動かすと途端に逃げていった。
そばにいない存在を諦める為には、考えない様にするのが精一杯だった。それでもやっぱり完全に消し去ることができずに、記憶の中で悶絶する。
彼女と最後に会ったのは、一週間前。
我儘を言って延ばして貰った別れるまでの一ヶ月ももう数日で期限が切れる。
自分はこんな短い時間で一体何をしたかったのかが分からない。こんな期間で彼女をもう一度自分に引き戻せるのだと思い込んでいたんだろうか。
それとも彼女の気まぐれで、嘘や冗談だったのだと言ってくれるのを待っていたんだろうか。
開いた冷蔵庫の前にしゃがみ込んで、乱れた髪の毛をより一層かき混ぜる。

何度感じたんだろうこの焦燥感。彼女が自分の前からいなくなる。一生、彼女を失ってしまう。あの声も、あの笑い顔も、指も、頬も、唇も、何もかもを永遠に触れることが叶わずに、これからを過ごさなくていけない。

名前を小さな声で呼ぶ。

勿論、答える声は無い。

あの少し呆れた様な、それでも愛おしさの含んだ甘い声で返事をして肩を竦める彼女の姿。

「……会い、たいよ」

誰にともなく、吐き捨てる。悲鳴にも似た自分の声に、どれだけ彼女を切望しているか思い知った。

会うだけでいい。でも声を聞きたい。触れたい。抱きたい。話がしたい。

違うんだ。彼女との道が離れてしまったことが悲しい。彼女の苦しみも悲しみにも、気付くことなく甘えていた自分が憎たらしい。

冷蔵庫の扉を掴んでいた指が外れて床に落ちた。

飴色の扉はアンティークなのだという。

チェッカーグラスの嵌め込まれた扉を開けると、来客を知らせるベルがカランコロンと鳴った。

「あら」

カウンターの向こう側で客と談笑していた友人が自分の来店に気付き、口端を上げる。

誰も座らせようとはしないいつもの場所を指差して、友人は微笑んだ。

「久し振りじゃない？」

「……電話くれただろ」

「ああ……あの時はごめんね。なんか取り込み中だったみたいね」

「まぁね」

久し振りに会った彼女といる時に、掛かってきた電話は友人からだった。大学時代の共通の友人が結婚するのだという。それのお祝いの件だった。

何も今じゃなくてもそう思ったのは事実だけれど、こちらの状況を友人が知る由も無いのだからそれを責めることは出来ない。

実際、彼女は電話中に自分の腕を抜け出し部屋を飛び出して、愚かな道化になり下がった自分は置いてけぼりになったとしても。

辛うじて電話くらいは三度に一度出てくれていたけれど、あの日から彼女は電話にも出ることはなくなった。

目の前に置かれた珈琲カップを見て「何か食べるものが欲しいんだけど」と言った自分に友人が首を傾げる。

友人の経営する喫茶店で、自分が食べ物を口にしたことは今まで一度も無い。

何も他意があった訳ではないけれど、何と無く珈琲を一杯飲んでそれで店を出る様にはしていた。

長居をしない。互いに深みにはまらない。それが鉄則になっていた。

そのルールを破ろうとしている訳ではない。

「いや、食事をしてなくて今日仕事中にぶっ倒れたんだよね」

「……あらら、そうなの？」

言い訳染みた返答を聞いて、弟の失態を聞いた姉の如く友人は一言二言注意の言葉を吐くとカウンターに背を向けた。

空き腹に珈琲を流し込むなんて胃に悪そうな行動は控えて、大人しく待っていた自分の前に湯気の立ったミネストローネが置かれる。

柔らかいマカロニが野菜の間を見え隠れしている。そんな大したことがないことでも泣きそうになった。

カウンターの横に腰掛けた客が新聞を広げている。

ミネストローネにスプーンを落とし、その一面を興味なく見ていた。

野球選手の顔と知らないグラビアアイドル。時代の移り変わりは

速過ぎて、もうついては行けない。男の顔も写真に載った何人かのグラビアアイドルも全く知らない顔だった。
酸味の強いスープを飲みながら、彼女の作ってくれたコンソメスープを飲みたいと思う。
別に市販のコンソメを使えば誰だって作れるでしょう、なんて可愛げのない、でも無性に可愛らしいことを言うのだろう。
会いたい。
「で、何かあったの？　聞いてもいいかしら？」
大きなカフェオレボウルに入れられたミネストローネを半分残したまま、彼女の思い出に浸っていた自分の目の前に友人が顔を近付けた。
短い髪の毛。少し垂れ気味の目にはそれを隠すように太めのアイラインが入れられている。
ジャムを塗ったくった様な唇がすぐ眼の前で動くのを見ていた。
友人はこんな顔をしていただろうか？　そう思いながら。
スープを半分残して、スプーンから手を放すと珈琲カップを持った。
友人のいるこの喫茶店に自分は一体、何を求めて来たんだろうか。
それが、カウンターに座りながらも自分にも分からなかった。
横の客の広げる新聞の所為で、他の客と自分たちの間には薄い壁が出来ていて、友人が触れそうな程顔を近付けても不思議に思う客は誰もいないようだった。
彼女と別れたのだと報告しようとしても、まだ辛うじて別れてはいないのだと意固地な自分が反論してきた。まだ約束の一ヶ月は過ぎていない。彼女と自分の糸はまだ繋がっているのだと。
かと言って、あの苦しい夜の話を友人にしてしまうことはどうしてもできなかった。
彼女を手離すきっかけになってしまったのだと知れば、友人は自らを責めるのだろう。彼女と付き合うきっかけを作ってくれたのも友人だったから。

友人に泣き言を言いに来た訳ではないことだけは確かだ。
ミルクも砂糖も入れないままで咽喉に流し込んだ珈琲は、想像していたよりも苦かった。
一気飲みして、いつも通りコーヒー一杯の金をカウンターに置き掛けて止まる。今回はスープも頼んでいたんだった。
そんな逡巡に気付いたのか、友人が苦笑する。
「スープは友人からの奢りでいいわよ」
「……ごめん、ありがとう」
何も話せないまま、カウンターに小銭を置いてジャケットを羽織る。
何か言いたげな友人をカウンター向こうに残したまま「結婚式のお祝いの件は、また後で連絡するよ」と言った。
歪んだ友人の顔。らしくない、はっきりとしない表情だ。
「分、かったわ……待ってる」
片手を上げた友人の指に指輪が光っていた。
そう言えば、彼女には指輪どころかネックレスも何も贈ったことがなかったのに気付く。
細い彼女の指に自分の贈った指輪が光るところを想像して、また体中が熱を帯びて来るのが分かった。
決してそんな時は来ないのだと、思う反面。考えてしまうと、どうしてもその姿が見たくなる。それでも彼女の指に指輪を贈るのならば、左手の薬指以外はあり得ないと思った。
完全に別れるまであと数日。自分の暢気さに呆れるけれど。
この喫茶店には彼女と来たこともある。
その時はカウンターでは無くて、向かいあうテーブルで珈琲を飲んだ。
彼女はミルクティー、甘いのが少し苦手な癖に砂糖を間違って二杯も入れた。
飲んだ瞬間、不味そうに尖らせた唇を覚えている。
カウンター前の椅子の背もたれに手を掛けたまま、その席を振り

返っても勿論彼女はいなかった。
そうか。俺は彼女を探しに来たんだ。
そんなことを改めて気付くと、ミネストローネが酸っぱかった意味も分かった。珈琲を飲みたかった訳では無くて、食事をしたかった訳はなくて、ただやっぱり彼女に会いたかった。
求めているのも、癒してくれるのも彼女だけだった。
どうしようもなかった。
「……ごめん」
もう一度、友人に言うと「なぁに？　何度も」と笑われる。
ごめん。もしかして、気付いていなかったのがごめん。そんな事をこんな場所で言える筈も無く、背凭れから指を放す。
またね、と言った友人に返事をしないままで背を向けた。
店を出ると、からんころん、ベルが鳴る。
振り返った喫茶店には白熱灯の柔らかな灯りが輝いている。いつの間にか暮れた街並みの中でここがそうやって柔らかく人を導くから、ここで自分は癒されるのだと勘違いをしていた。
いつもここに自分は逃げ込んでいた。
曖昧な関係を続けて逃げ場を作り、自分がマイペースでいられるように誰にも触れることのできない場所を作っていた。
大切な存在である筈の彼女にも壁を作って、いつか逃げることができるように退路は残したまま。
彼女が本当に、完全に自分の物になるまで、自分は変えないままでいいのだと、そう大人の悪知恵で思っていただけだ。
大きな硝子窓の向こうで、カウンターに囲まれた友人が店の前から歩き出そうとはしない自分の姿を見つめている。
このまま手を出せば、友人は自分の胸に抱きついてくるのだろう。そんな錯覚もしてしまう。
もし彼女が心変わりをしなければ、自分は本当に一人になってしまうのだろう。
そう思うと、曖昧な彼女を投げ出して、もしかして恋愛感情を抱

いているのかもしれない友人の手を取ってしまえばいい。そんな勝手なことも思った。
そうしたら、確実に何かは手に残る。
窓の向こうの友人は、まだ自分から視線を放さない。待ってるのか、そう思う程に真摯な瞳。
彼女に出会う前まで、自分の中で一番は友人だった。女性としてではなく、人間としてだけれど。
自分の甘えられる存在。大学時代の先輩だったせいか、優柔不断な性格も隠すことなく曝け出していた。馬鹿げたことも笑いながら許してくれる。情けない自分も、受け止めてくれる。
自分勝手なことをして連絡を絶ったとしても、あの喫茶店は相変わらずそこにあって、扉を開ければ出迎えてくれた。
それがどうだ。
彼女と来たら、会いたいと言えば「忙しいから駄目」触っていいかと聞けば「本、見てるから」と返ってくる。
その上、忙しい自分の仕事を黙って見ているのかと思えば、不貞腐れてソファーで聞えよがしの文句。下手するとそのまま部屋を出て行ってしまう事もあった。大概がコンビニで買い物をして戻っては来るけれど。
触れていいのか、分からない。真意が読めないのは怖すぎて、つい慎重になった。
突然、聞き分けの良くなった別れる二か月前。忙しいクライアントとの打ち合わせで何度もドタキャンした会う約束も、決して文句も言わず彼女は電話を切った。
分かってくれたのだと、どうしてその時の自分は思ったのか。
声無く、胸の奥で不安を隠し持っていたのだとどうして思えなかったのだろうか。
カウンター向こうの友人は、自分を愛おしく思ってくれている。
それを知っていながら長い間見ない振りをしていた。甘えさせてくれる姉の様な存在を、気持ちを明らかにさせることで失いたくは

ないのだと、そう思っていた。
背けない視線。
おいで、と言えば簡単に男と女になるだろう。
でも、違うのだと分かっている。今、どうしても欲しいのは友人の指でも声でも、勿論酸っぱいミネストローネでも無くて、彼女だった。
カウンターから目を離せない自分の目の前を、新しい喫茶店の客が扉を開いて入って行く。
からんころん。ベルが鳴り響いて、それに押し出される様に白熱灯の柔らかなオレンジに背を向けた。
会いたいよ。
やっぱり会いたい。
肌寒い風を避けようと、ポケットに入れた手に触れた携帯電話が鳴り響いている。
彼女からではないんだ、それだけは分かっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7850t/

恋愛小噺

2011年11月22日00時24分発行